

夢を叶える努力貯金

ほお袋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「努力貯金をしよう！」

トレーナーはミホノブルボンに、大きなポスト型の貯金箱と、虹の蹄鉄コインを手渡した。

目 次

1枚目	一步目の集中力	1
10枚目	計画の先駆け	6
20枚目	注目の踊り子は手のひらの上に	12
21枚目	全身全霊に身を染めて	19
reスタート	—	25
好転一息	—	35
30枚目	二の矢を番えて急ぎ足	43
瞬きのスピードスター	—	54
40枚目	脱出術	67

1枚目 一步目の集中力

「努力貯金をしよう！」

彼は嬉々として鞄から大きな赤いポスト型の貯金箱を取り出して言つた。

この突飛な行動に、会議室に呼ばれたウマ娘、ミホノブルボンは首をこてん、と傾げて「努力貯金とは？」と聞き返した。

「君が努力するたびに、俺はこの虹の蹄鉄コインを与えよう。それを、君はこの貯金箱に投入する。それだけのことさ」

「不可解。これにどのような意味が？」

「やつているうちにわかるさ。俺はこれを継続してトレーナー試験に受かった！ 効果は俺がトレーナーであるという事実で保証する！ ほら、昨日のトレーニングはハードだつただろ？ まずは一枚。ほ

れ

差し出される虹の蹄鉄コイン。それがどんなでもない貴重品であることは、ミホノブルボンもよく理解していた。

「それは希少な品だと聞き及んでいます。それほどの物品は受け取れません」

「いや、これ俺が持つてもただのインテリアだからね？ 俺からしたら数百円の価値もないし。だから大丈夫。宝の持ち腐れはもつたいないのさ！」

「しかし」

「よし、じゃあこうしよう！」

受け取りを済るミホノブルボンに、彼は嬉しそうに指を立てる。どこか愚かしくも芝居がかつた仕草に、しかし彼女の反応は揺るがない、かと思われた。

「この中身が100枚溜まつたら、どんな願いも一つ叶えよう」「つ！」

ピン、と彼女の耳が天をつく。尻尾の毛は逆立つように外に跳ね、耳と同じく起立していた。

「どのようなことも？」

「うんうん。どんなことでも。今のうちに誓約書でも書いとく？　俺は逃げも隠れもしないけど！」

「はい。速やかに誓約書の作成手続きを開始します」

「お、おう。食い気味だね君」

ぎらり、と鋭く光る彼女の眼光。前のめりな姿勢に、彼は自分で言い出しておきながら引き気味に、鞄の中からファイルを取り出した。

「はい、これ」

「拝見いたします」

あまりにも早い手刀。俺でなきや見逃しちゃうね——などという

冗談が、目の前で本当に繰り広げられた。

あれ？　と手元を見た時には、もうミホノブルボンがその書類を読み進めている。

「……マスター。この達成報酬についての詳細を求めてます」

「え、いや。そこに書いてある通りだけど……」

『10枚達成ごとにミホノブルボンのお願いを一つ聞く』では、余りにも曖昧です。これでは、100枚達成時の内容と釣り合いがとれません。より小さな要求を快諾するもの、という意図があると思われますが、これでは認識の相違が発生する恐れがあります。スコープの内外について詰める必要があると判断します

「……え、君は俺に何させたいの？」

「決めかねています。暫定では、新たなトレーニング器具の調達。有力なウマ娘との合同トレーニング。両親よりのオーダー、『社会性の向上』のための社会見学になります」

「食いつきまくった割に普通で安心したわ」

肩を落として息をつく。そんな仕草までジッとミホノブルボンは注視している。休まる様子がなさそうだ、と彼は肩をすくめて口を開く。

「今言つたやつなら問題ない。……まあ、万単位の買い物連発はさすがに俺の経済力的に厳しいから、一ヶ月に5万円までの制限はつけよう。来月に貯蓄も可能、つてことで」

「わかりました。その旨を誓約書に加筆させていただきます」

(遊びというか、気晴らしのつもりだつたのになあ……)

もしかしたら信用されていないのだろうか。いや、ミホノブルボンは非常に几帳面で、物事を俯瞰的に捉えようとする。信用とは別に、こうした決まり事は綿密に決めなければ気が済まないのだろう。

「マスターの目元が4ミリ上がり、眉が7ミリ下がるのを確認。口元の固さ、並びに呼吸が深く、長くなっていることから、ステータス『傷心』と推測。何か不備がありましたか?」

「……いや。もしかしたら俺は、まだまだ君のことを知らないのかも知れないって。そう思つたんだ。不甲斐ないな、つて」

見透かされているような洞察力。彼が同じように彼女のことを見ると……垂れている耳と動かない尻尾から、ほんの少し落ち込んでいることに気がついた。目元や口元は変わらないが、思いの外わかりやすいのかもしれない。

「マスターの口元が綻ぶのを確認。機嫌の向上を感じました。原因は不明」

「いや、思いの外。君のことわかるのかもしれない、つて。それはどうと、何か落ち込んでいた、のかな?」

「……はい。マスターは私のことについて、『知らない』と自己評価を下しました。しかし、トレーニングの質、並びにレースの出走など。これまでその手腕は的確であつたと判断します。つまり、『私の社会性の低さが問題』ではないかと痛感しました」

「うーん……君に比べて俺は君のことを理解できていない、つて痛感してたわけだけど。お互い様、つてことかな」

『隣の芝は青い』あるいは『似たもの同士』……な状態と判断

「はつはつは! そりゃいい。それなら、何もネガティブなことはない。むしろ、最高の状態だね」

そう断言すれば、ミホノブルボンはその口端をわずかに緩めて、微笑みを浮かべてしつかりと頷いてみせた。

「はい」

それでは、次は期限の記述がないことについてですが——と、話は続く。少なくとも、二人にとつては和気藹々とした様子で話を繰り広

げて。

それが終われば、ミホノブルボンは、赤いポストの貯金箱をぎゅっと抱え込み、片手には誓約書の写しをしつかりと握り。寮へと足早に戻つていった。

一枚の蹄鉄コインが電灯に照らされきらりと、虹の輝きを残像のようすに映した。

自室の机の前に座りながら、ミホノブルボンはジッと蹄鉄コインを見つめる。見つめれば見つめるほど、力が湧き上がるような、胸の奥から温かさが溢れてくる。

虹の蹄鉄コインは、ウマ娘にとって値千金の価値がある。数枚あれば購買で高性能なトレーニング器具、あるいは高品質なニンジンと交換することが出来る。数十枚あれば、オーダーメイドの靴、蹄鉄、勝負服さえ特注することが可能な逸品だ。

100枚集まれば、どんな願いもかなえられる、というのもあながち嘘ではない。それほどの価値が、虹の蹄鉄コインには詰まっている。

ウマ娘であるミホノブルボンでも、そのレートがどのような理屈で設定されているのかはわからない。採算のとりかた、というのも謎だ。あるいは慈善事業かもしれない、と思わせる非生産的な一面も備えている。

虹の蹄鉄コインの入手経路は限られている。G1レースに出場して1着を掴むこと。何か特別な成績を残して、理事長よりいたくこと。『URAファイナルズ』を勝ち抜くこと。判明しているのはこの程度で、他にも何か入手手段はあるのかもしれない。

加えて、このコインは原則として譲渡が禁止されている。指導元のトレーナーからウマ娘に、あるいはウマ娘からトレーナーに、という譲渡だけは認められているが。

「……誓約書、第5条1項『努力貯金により譲渡された虹の蹄鉄コインは、貯金以外の用途で使用してはならない』……」

このような文言が取り込まれている、ということは即ち、そういう

ことなのだろう。

悪事に手を染めている、とはミホノブルボンも思っていない。ただ、正規の手段で手にしたものではない、ということはどうかがい知れる。

「……」

穴が開くほど見つめていた。彼女が噂通り目からビームでも撃てるのなら、コインは原形をどどめずグズグズに溶けていただろう。

「……オーダー、開始します」

氣合を一息。固唾をのんで頷けば、彼女はそのコインをゆっくりと、赤いポストの投函口に近づけて。

——カラん、と硬く乾いた、寂しい音が響き渡る。

「オーダー、完了」

手帳に正の字の一画目「一」を刻むと、彼女はその貯金箱をジッと見つめて。時には左右に揺らして、その中身の所在を確認する。カランコロン、と寂しい音ばかりが響き渡る。

「……」

しかし、確かに中身がある。揺すれば音が鳴る。

これこそが最初の一歩。小さくとも、寂しいと思えども。「0」から「1」への変化に、彼女の口元は確かに綻んだ。

10枚目 計画の先駆け

コインが見えない空洞の中を舞い、カチヤン、と他のコインにぶつかり硬質な音を奏でた。

「ミッショーン、コンプリート。10枚目のコインの投入、達成しました」

誓約書に則り、ミホノブルボンはトレーナーへのお願いの権利を得た。10枚ごとに手に入る権利のおかげもあって、自己評価において「絶好調」を維持してトレーニングをこなすことができた。

貯金箱を揺らしてみれば、まだまだ高い音だが、たしかにジャラジャラと金属同士が擦れ合う音が聞こえて来る。その中身が努力の証となれば、感慨も一入だ。これだけ頑張った、という質量が、確かに貯金箱の中に詰まっていた。

「……胸の奥からの発熱を確認。つまり『高揚』のステータスを実感」貯金箱を揺らして音を聞けば、自然と口元が綻んだ。満足するまで、チヤリ、チヤリと控えめに音を鳴らすと、彼女はそれを小さな金庫の中に仕舞い込む。

そして向かうのはクローゼット。開けてみれば、閑散とした中に、上下4着ずつのシャツとパンツ、そしてパークターが2種類ある。体操服や部屋着は箪笥の中に仕舞っている。

「権利執行の予定日。最高気温は31°C、最低気温は25°Cと調査済み。例年通りであれば湿度は82%と予測。体感温度は非常に高く、薄着が望ましい……」

情報の精査は終わっている。あとは出かけるための服を選ぶだけ、だつたが。

手札は10着。冬用の5着を除けば、実質の手札は5着のみ。組み合わせは四通りにパークターの着脱のみ。

「当日のデータから、この2着が最適解と判断……」

合理的な判断は、薄手のシャツにパンツのシンプルな組み合わせ。それが正しい選択なのだと、すぐに導き出せる。

「……計画を修正。当日、持参するドリンクの数を3本から5本に変

更。タオル、その他付属品の持ち込みが必要と判断」

しかし、最善は違うのだと再計算。

頭の中で計画を練り上げながら、ミホノブルボンは準備に取り掛かつた。

（天気は曇り。降水確率は午前20%、午後40%の予報。過去10年の記録を遡り、類似データを分析したところ、午後の降水確率は93%に上昇。折り畳み傘の準備、完了。持ち物……オールクリア。間もなく出発予定時刻、9時12分21秒。……寮より出発します）

寸分の狂いなく、ミホノブルボンは自室から足を踏み出した。

そこからは、ラップタイムとの戦いだ。計4つのポイントに絞り、彼女は目標タイムを設定していた。

（次の信号までの残り時間、2分10秒。赤信号により1分3秒の停止後、先陣を切り信号を横断）

その目標タイムは、早くても遅くとも許されない。正確無比な計画と、速度が要求される。

（これより直線上に――）

ラップタイムを正確に刻む。そうして到着するのは、待ち合わせの駅前広場。

「マスター、お待たせいたしました」

「ん、俺もちようど来たところ。待つてないよ」

（オペレーション『お決まり』を達成）

ミホノブルボンの口元が緩む。

彼はそんな彼女から何か感じ取ったのか。「お！」と声を上げる。

「リングからリボンに変えたのか。いいね。可愛く決まってる」「……！」

ミホノブルボンは普段、右耳に水色に発光するリングをつけている。しかし、今はそのリングの代わりに、鮮やかなワインレッドのリボンがワンポイントとして結び付けられている。

（ステータス『高揚』を感知……体感気温、更に5°C上昇）

「少し安心した。オシャレに興味があるなら、立派な女の子だ」

「……ありがとうございます」

「ん、それじゃあ行こうか。切符はもう買つてるから大丈夫」

そういうつて、彼は先導するように前に行く。

ミホノブルボンの前を行ける。もはや、そんな存在は彼だけだろう。

小気味良くコツン、と靴の音を鳴らして。ミホノブルボンは、彼の後に続く。自分の両手を隠すように後ろでぎゅっと握り込み、その大きな背中を見続けた。

権利の執行……オペレーション『お出かけ』は昼食までプラン通りに進んだ。ゲームセンターで遊んだ後に、静かな本屋の空間に浸り、昼食はカフェで軽く済ませてコーヒータイムに。

「今更なんだが

小さな音を立ててカップをソーサーに置きながら、彼は対面に座るミホノブルボンを見る。

相も変わらず、表情の変化に乏しいウマ娘。その耳と尻尾の反応も、飲食店の中というだけあってかほとんど動かない。時折遊ばせるよう尻尾が横に揺れ、耳が反射的にピクリと動く程度だ。
「10枚目の達成報酬『お出かけ』だけでよかつたのか？」

「はい」

短く、きつぱりと彼女は断言する。ふわり、と栗毛の尻尾が宙をかく。

「てつきりトレーニング用品とか、備品の買い出しの付き合いかと思つてた」

「現状、それらは『不必要』です。マスターのトレーニングメニューをこなすことが『最善』だと判断

「そつか。やつぱり、刺激足りない？」

「……？『刺激』とは？」

不思議そうに彼を見つめるミホノブルボンに、彼は曖昧な笑みを浮かべて「何でもない」と返した。そこからはジツとコーヒーを見つめて、何かを考えこみ沈黙する。

静寂の帳が降りる。他の客の話声、キツチンから聞こえる雑音。環境音には事欠かないが、それはミホノブルボンと彼の音ではない。

彼の瞳の奥はどこか、陽炎のように揺らいでいる。その強く、鋭すぎる視線がミホノブルボンに向けられる事はない。否、誰に向けられることもない。しいて言えば、彼自身に向けるための視線だろう。

「……」

ミホノブルボンの瞳が、柔らかく垂れる。この静寂に全てを委ねるように、全身から力を抜きながら、彼のことを見つめる。

(非常に深い『集中状態』を感知。……先ほどの会話から、おそらく) パタ、パタ、と些細な環境音が増える。

それからカフエで会話に発展はしなかつたが。

その音が減る、ということもなかつた。

ふと、目についたのは宝石店のショーウィンドウだつた。
情熱的に、それでいて精巧で、纖細な輝きを放つ青の輝きに、目を奪われた。

(……名称『アウイナイト』。私には『不要』です)

しかし、そう結論付けても視線は吸い寄せられるように、アウイナイトに向いてしまう。

(エラー発生。原因……不明)

物欲に惹かれた、というわけではない。おしゃれに欲しい、と思つたわけでもない。そんなことを、ミホノブルボンは自発的に早々思わない。

ならばどうして、と考えても答えは出てこない。後ろ髪を引かれる思いながら、彼女は前に進む。エラーが深刻なバグに繋がらないために、視界との接続時間を減らすために。

「……」

水の中のように、まとわりつくような沈黙。

しかし、それも新たな区画に出れば自然と霧散するのだった。

さて、帰ろうか。

そんな時刻になつた頃合いに、ざあ、と音が響き始める。

「……げつ」

彼の口の端が引きつった。目の前で盛大に降り注ぐ雨に、心底うんざりとした様子で肩を落とす。何か忙しなく視線を泳がせるが、どこかに止まることはなかつた。

「マスター。折り畳みの傘でよければ用意があります」

「助かる！ いや、今日は午後40%だから降らないと思つてたんだ。

君は用意がいいな」

「『備えあれば憂いなし』とは、まさしくこのことかと」

「ほんと、その通りだよ」

ミホノブルボンは早速、折り畳み傘を広げてみせる。一人で入るには十分な広さであり、雨粒がしみ込まない素材で出来てゐるそれは、実のところ日傘と兼用できる代物だ。白塗りの外側のふちには黒い兎が輪を作るようになつていて、内側は黒塗りとなつてゐる。

「どうぞ、お入りください」

「……え、一本だけ？」

「……？ 傘は通常、一本しか持ち歩かないかと」

「あ、うん。そりやそうか。え、一緒に入るの？」

「はい。俗にいう『相合傘』というものです」

「言い直さないでよろしい。……」

キヨロキヨロと、拳動不審にまた周囲を見始める彼に、ミホノブルボンは首を振つてこたえる。

「この近辺に傘を売つてゐるお店はありません。約300メートル先にならありますが……駅に着く方が効率的です」

「あー、うん。そつか」

「どうぞ、中に」

「……お邪魔します」

と、傘の中に入ろうとするが、そこで邪魔をしたのが身長差であった。

ミホノブルボンの身長160センチに対し、彼の身長は185に至る。およそ25センチの差に、レディースの折り畳み傘という狭く

低い領域。

ミホノブルボンは、頑張つて腕を天に突き上げているものの……彼の頭は傘の骨組みに当たりそうだ。

「お邪魔ついでに、傘を持つ重役、任せてくれないか？」

「……承認」

ミホノブルボンの切り替えは早い。彼が傘を手に持つたかと思うと、鍛え抜かれた足から繰り出される巧みなステップによつて、ピタリとその横に張り付いた。

「……近くない？」

「傘のスコープ内に入るため『必要』であると判断。『問題ありません』」

「……うん、そつか」

二人は同じ傘に入りながら進む。蒸れるような暑さと、跳ね飛ぶ雨。高い湿度もあり、触れれば服が湿っぽい。そして触れずとも、お互いの熱は漂うように感じ取れた。

「……マスター。あと2センチ傘を右に寄せてください」

「ん？ いや、いいよ。君の身体の方が大事だ」

「……」

雨音の中に、鼓動は溶ける。熱が触れ合う。

(オペレーション『お出かけ』……達成)

後日、彼が微熱を出してミホノブルボンに心配されるのは、また別の話。

20枚目 注目の踊り子は手のひらの上に

ミホノブルボンの武器は、サイボーグとまで言わしめるほど高い精度を誇る走りにある。

彼女が走れば、ラップタイムを0・1秒単位で厳守できるだけの精度をみせる。即ち、彼女は絶対に「掛からない」ウマ娘なのである。加えて、彼女の「逃げ」の走りも相まって、まさしくレース中の彼女は不可侵の領域に至ることができる。

それがどれだけ、ほかのウマ娘にとつて恐ろしいことか。

高低差1・6メートルの上り坂を前にして、ミホノブルボンの脚色は衰えない。むしろ、それこそが真価とばかりに、加速までしている。「ええ……」

顔を青くするのは、練習の見学に来たライスシャワーだ。鋭利な瞳で坂を爆進するミホノブルボンの様子に、彼女は震えながらも見学している。何か盗めるものはないかと、懸命に、ともすれば睨みつけるようだ。

そんなライスシャワーの隣で、彼はカチツとラップタイムの計測に勤しむ。計測したそれを一瞬睨みつけると、また彼女の走りを注視する。

「……よくないな

「えつ？」

ラップタイムを計測し終えれば、第一声はそれである。思わず横からそのタイムを覗いたライスシャワーは目を見開き、彼のことを見て、もう一度タイムを見て、彼を見る。

彼は苦虫を噛み潰したような顔で息を吐いている。

「マスター、評価は？」

「……精度は完璧だ」

戻ってきたミホノブルボンは開口一番に聞く。彼が嘘偽りなくそう口にすれば、ミホノブルボンもまた肩の力を抜いて息を吐き——

「マンネリだな」

ひゅつ、と鋭く呑み込んだ。

「先月とタイムが1秒も変わっていない。……菊花賞なら通用する。だが、この調子なら春の天皇賞さえ怪しい。今年の有『font:u 140』馬『/font』記念ともなれば論外だ」

「……有『font:u 140』馬『/font』記念の目標タイムは、2分32秒02と記憶しています」

「遅い。彼女は今年最後、レコードを叩き出す。勝負したいなら2分30秒を切れ」

「はい。目標修正。芝2500にて、2分29秒を目安に調整を開始します」

有『font:u 140』馬『/font』記念。そこにおける2分30秒の壁は、過去どんなウマ娘も超えられなかつた壁である。あのシンボリルドルフでさえ、2分32秒8なのだ。それを、2秒以上……ほぼ3秒縮めろということだが、どれだけの難題か。

しかし、それを突きつけられても、ミホノブルボンの顔色は変わらない。淡々と、目標に向かつて真っ直ぐ、進もうとしている。

「ライスシャワー。君も有『font:u 140』馬『/font』記念を目指すなら、2分30秒は切るといい。そうでなければ、少なくともうちの子には絶対に勝てない」

「……っ！」

ライスシャワーは肩を跳ねさせ、続いて耳をペタンと畳み尻尾を垂れた。俯いて、表情までは見てとれない。

「……菊花賞が終わるまでには決めるといい。うちの子の好敵手になつてくれるることを期待している」

ライスシャワーの返事を待たず、彼は手を二度叩いて口を開く。

「まずは菊花賞だけど、やることは変わらない。坂でトドメをさして逃げ切る。上りも下りも加速して、そのままゴールまで突つ切る。減速は許さない。トップスピードに乗り切つて、レースを決めるんだ」「オペレーション、インプット。遂行のため、スタミナの強化が課題となります」

「体幹もだ。下りでこけたら選手生命どころか命に関わる。体幹を第

一に、次点でスタミナだ。坂の勢いに体を乗せられれば、スタミナの消費も抑えられる。坂の往復をしながら、その二つを鍛えるんだ。2セット終えるごとに1セットトレース形式で走るのも忘れるな。今日はこれを2セット後に15分休憩後、1セット行つて終了だ

「オーダー受理。いつてきます、マスター」

「いつてらっしゃい。何かあればすぐに指摘する」

ミホノブルボンが走り、彼が緩みを見つけて指摘する。まさしく、二人三脚の如き呼吸を見せる二人。

ライスシャワーは、目と耳を片時も離さず、その様子を観察し続けた。

「 笹針師、と呼ばれる職がある。

針師とは通常、針治療などをを行う人間のことだが、この笹針師はウマ娘専用の針師、とでも言えばわかりやすいだろう。

歩様に異常をきたしている状態の『跛行』。筋炎や筋肉痛の俗称『コズミ』。これらは血液の循環が悪くなり、うつ血を起こすと呈するこ

とがある。

笹針師はウマ娘に笹針と呼ばれる特殊な針を使用してこのうつ血をとり、症状の改善を図ることを生業にしている。効果のほどは針師の腕前によるが、成功事例として治療後に爆発的な身体能力の向上、あるいは急速な体力回復。超一流ともなれば、そのウマ娘の脚質をほぐし無意識的に効率的な走り方を伝授する……などという眉唾な話まで存在する。

一方、失敗した時のリスクは悲劇そのものだ。調子が狂うならまだいい方で、練習に身が入らなくなることはザラ。とても直近のレースで勝てるような状態ではない。最悪、身体能力の大幅な低下さえ起こり得る。

トレーナーの中でも、この乱刺手術ささばり——笹針を使つた治療行為のこと——を行える人間はごく稀だ。免許は治療項目ごとに分けられ多岐に渡る。しかし、そのどれか一つの免許を得ることさえ、非常なる難問である。天下の『トレセン学園』と言えども、お抱えの笹針師は

居ないのだ。

効果の代償に、責任はウマ娘の将来としてのしかかつて来る。

治療する側も、される側も。特別、職人魂や覚悟がなければ嫌に決まっている。

箠針師とはどうにも、難儀な職人なのである。

あれだけ外で走りながら、その脚は瑞々しい肌色のまま光を反射する。よく鍛えられている証拠に、彼女が少し力めばしなやかな筋肉が肌を張り、努力によつて手に入れた美しい曲線を描き出す。

氣を抜けば指が滑りそうになるほどきめ細かい肌に、傷はおろかシミ一つない。眩しい健脚の調子を、彼は硬く厚い皮膚に覆われた指で確かめる。

指を少し沈め、両手で脚を覆い張りを確かめ、時折彼女の顔色を伺いながら。

「左脚、ハムストリングに刺激を確認」

「わかった。他には?」

言いながら、彼が右足首を触ったところで、ピン、と尻尾の毛がわずかに逆立つた。

「右足首か」

「……2セット目の下り時、体勢を崩したことが原因と思われます」

「後からきたかあ……幸い、走るのに問題なくてよかつた。念のため、明日はオフにしよう」

保健室のベッドでうつ伏せに寝転ぶ体操服姿のミホノブルボンに、ベッドに腰掛けてその健脚を直接触る彼。

この場面だけを見れば、とんだ勘違いを生み出すことは請負だ。加えて、これからやろうとしていることは、彼にとつても内密にしたい事である。ベッドを仕切るカーテンを引いていることで、余計に怪しさが増しているのは仕方のないことだった。

「……日に日に逞しくなつてゐる。普通の子なら、脚全体が痛くなる」「マスターのご指導の賜物です。この脚を生み出したのは、マスターです」

「いや、これは君の努力の結晶だ。俺たちは君たちに少し幅広い選択肢を提示しながら、ほんの少し手を引くことしかできない。……これだけ見事な脚は、他でもない君だけのものだ」

「……同じ練習量を継続した場合、故障率は92.1%と算出されます」

「なら、君はもしかしたら7.9%を踏む力があつたかもしれない」「マスターの献身と貢献の恩恵は、私の身体と脚に、確かな記録として刻み込まれています」

「……それ、外で言わないように。勘違いされかねない」

「……？　問題点がわかりません」

「その言い方は、俺が君のことを所有物のように扱っていると思われかねない。含みも少しある。弁明のために答弁するうちに、この治療のことまで話さなければならぬかもしれない」

ピコン、とミホノブルボンの耳が直立する。運動するように、尻尾が彼の鼻先を掠めて揺れた。

「つまり、『秘密の共有』のため必要な措置だと？」

「そういうこと。強請られたつて、君とあの子以外にはしたくない」

ふさ、ふさ、と尻尾が遊ぶように左右で揺れる。まるで猫じやらしのごとく。時折鼻先を掠めていくそれに一瞬目を奪われながら、彼は努めて彼女の脚の方を注視する。

「……追加トレーニングはなしですよ？」

「……？　発言の意図が理解できません」

「ああ、いや。すごい機嫌良さそうだつたからね」

「たしかに、『高揚』のステータスは感知しています。しかし、マスターの指示に背く理由にはなりません」

「ならないけど。……よし、じゃあ始めるね」

「お願ひします。……状態『脱力』に移行」

ペたん、と今まで揺れていた尻尾は彼の膝の上に垂れ、耳は綺麗に折り畳まれる。瞼は閉じられ、心なしかベッドにさらに深く沈み込んだように見える。

彼女の脚から手を離した彼は、ベッドの横。椅子の上に置いていた

ポーチから、『筐』——筐のよう^に膨らんだ針を正確に通すための補助器——と非常に細い治療針を取り出す。『筐』のネジをしめて空洞の広さを調節すると、彼はそれをミホノブルボンの柔肌に押し当てた。

治療後の彼の手は赤黒い色を残していることが多い。

うつ血をとるためには、当然出血が伴うということ。悪くなつた血流や血そのものを外に流すために、注射針ほどの針を用いることもあります。その際に、彼は流れ出た血を指で掬い、粘度や質を確かめる。更に治療が必要か、それほどの症状でもないか、というのを彼は「血」から判断するのだ。

「止血まで終わつたよ。もう動いても大丈夫」

赤黒く、ほんの少し獵奇的ともとれる色をウェットティッシュで拭い取りながら、彼は治療が終わったことを宣言する。

ミホノブルボンは「ありがとうございました」と口にした後、後始末に勤しんでいる彼のことを横目からジッと見つめる。

相変わらずの手際というべきか、ベッドのシーツにはシミひとつ落ちとしない。脚の調子は確かに快調で、今すぐに走り出せば自己ベストを更新出来るような、ある種の全能感に包み込まれる。その感覚が、治療の成功をありありと証明している。

彼は嫌な顔一つせず、ミホノブルボンが流した血を、針についた血を拭い取つていく。いつそ清々しいほど真剣に、彼は赤黒い色と向き合つてている。

耳がピクピクとわずかに動く。尻尾が置き心地でも確かめるように、彼の膝上で上下に揺れる。

「こんなになるまで、よく頑張つてくれた」

そう言いながら、後始末を終えた彼は、財布の中から虹の蹄鉄コイン一枚取り出し、ミホノブルボンの顔横に置いた。

「……20枚目の取得を確認」

「ああ、おめでとう。ようやく序盤を切り抜けた、つてところかな」「『権利』の取得を確認。マスター同伴の『湯治』と『治療』を希望します」

「え、うーん……それ、今すぐには無理だけど。あと、治療は今日やつたからしばらくはやらないよ」

「はい。時期は『菊花賞』後を日安に希望します」

「……ピックアップはしておくけど、宿が取れなかつたら勘弁してね」「はい。よろしくお願ひします」

パタパタ、と尻尾がはたきのようになに彼の膝を叩く。耳はピンと天をつき、枕に埋もれた口元までは見えない。しかし、目元はほんの少し柔らかく、緩んでいる。

「お風呂は明日の朝からね。体を拭くだけにとどめること」「はい」

そう言つて彼が立ち上がりうとするも、ミホノブルボンの尻尾が彼の膝上を占拠して押しとどめる。

「……菊花賞のことだけど」

腰を落ち着けた彼の膝上に、尻尾が居座つた。揺れることはなく、座り込むように預けられ。

二人の会話は、もう少しだけ続いたのであつた。

21枚目 全身全靈に身を染めて

計画を組み立て、物事がうまく噛み合い結果を残したとき。喜びを一層深く感じる者もいれば、できて当然だと冷める者も居る。

これは計画の構築能力の有無に関わらず、本人の気質によるところが大きい。人は乗り越えるべき壁が高いほど、比例して達成感も大きくなるものである。これにプラスされる感慨というものは、努力や思い出といった達成までの過程が関わってくるが、その影響力は個人差が大きいので置いておく。

一方、計画を組み立てイレギュラーが発生した場合。計画通りとかずとも、たしかに結果を残せたとき。あるいは、思いがけず転んでしまったとき。

何を思うのか。それは、直面した本人にしか知り得ない。

三冠ウマ娘になること。

それは、ミホノブルボンにとつて大切な夢であり、叶えたい目標である。

もともと、ミホノブルボンは短距離で強い、とデビュー前にトレーナー間で評価されていた。

事実、当初のミホノブルボンはとても中距離でさえ走りきるのが難しいほど、スタミナに欠陥を抱えていた。3000の菊花賞など、夢のまた夢。結果を残すならマイルまでだと、そう言われ続けた。

三冠を目指に、夢物語と言わながら、ミホノブルボンは決して折れなかつた。手に余る、とトレーナーたちが次々と手を引く中、あるトレーナーが、ミホノブルボンにこう提案した。

『俺じゃ君を三冠で勝たせられない。だけど、それを実現できるヤツなら知つてる』

そうして紹介されたトレーナーが、現ミホノブルボンのトレーナー、彼であつた。

「調子は？」

「心拍数、呼吸、ともに安定しています。非常に『落ち着いた』状態です」

与えられた待機室の中で、二人は最後の打ち合わせ……とは名ばかりの、会話に洒落込んでいた。

「君の夢は目の前だ。すぐそこだ。これに勝てば、夢が叶う。……そう思うと、俺は気持ちが昂つて来る」

「……」

ミホノブルボンは天井を見つめる。そしてしばらくの沈黙の後、彼女はゆっくりと目を閉じて……大きく息を吐くことなく、至つて平静に口を開いた。

「体温にも変化はありません。至つて平常です」

「そうか」

トレーナーは長く、長く息を吐いた。ミホノブルボンの代わりに、と言わんばかりに長い間。

そして風を切るように鋭く空気を吸い込むと、彼はそんな勢いが嘘のように。しなる柳のように掴みどころなく口にした。

「君の予定は未定だ。結果が出たら決定だ」

「……？ 発言の意味がわかりません」

瞳が揺らいでいる。無機質に見えて、早々揺れることのない彼女の瞳は、彼をジッと見つめている。

「……つまり、レースっていうのは結局。蓋を開けて中身を見るまで、誰にもわからない。そういうことだよ」

「……マスターには、何か懸念事項がある、という意図を感じます」

「……そうだね。单刀直入に言うよ」

——全力を出せ、と。

恐ろしく静かに、刀の切先の如き言葉がミホノブルボンをさした。

「……マスター？」

「10バ身以上の差をつけて圧勝しろ。その心つもりで挑め。クラシックに、君のカタログスペックを超えた子は存在しない。この三冠目で、ミホノブルボンというウマ娘の真価を示せ」

雷が鳴り響いたような衝撃に、ミホノブルボンは耳を尖らせ尻尾の

毛が総毛立つ。つま先から頭のてっぺんまで、ぶるりと震え上がり、その瞳を動かせなくなつた。

「行つてこい。俺が今日できることは、ここまでだ」

彼はそう言つて背中を見せた。

ミホノブルボンは、思わず視線を上げた。ほんの少しして、天井を見つめていることに気づいた彼女は。

「オーダー受理」

しつかりと頷いて誓いを紡ぐ。それは、彼が控室の扉を開けるのと同時にあつた。

「ミホノブルボン」

そこで一度、言葉に詰まる。

いつもなら「始動します」などと言つていた。しかし、それをこの場で言うのは「違う」気がした。

だから、彼女はふと、その言葉を選んだ。

「——飛翔します」

無敗の二冠ウマ娘、三冠目を手にすることはできるか——そんな文句を気にすることなく、ミホノブルボンはゲートの中から、ただ真っ直ぐに前を見つめた。

整地された芝のコース。不備は当然受けられず、空は快晴。絶好の良バ場だ。前日に雨が降つた、ということもなく、内側のぬかるみも気にする必要はないだろう。

(状態は『良好』。過去データから算出して、マスターからのオーダーは達成可能範囲——)

そこで一度、ミホノブルボンは首を横に振り、深く、深く息を吸つて吐いた。

(『不要』。私はただ、『最高の走り』をマスターに届けるだけ)

決意を固めたところで、出走直前の合図。同時に、ミホノブルボンは踏み込み、スタートの態勢を取る。

(……コンセントレーション)

そしてゲートはその口を開き。

誰よりも先に、流星のごとく閃いたのは——ミホノブルボンだった。

『ミホノブルボン、これ以上ない好スタートだ！　他のウマ娘たちが揃つてスタートする中、ミホノブルボンだけは1バ身先を踏み抜いた！』

ミホノブルボンの走りは単純明快。誰よりも先を行き、己のタイムを刻みつける。そのタイムが誰よりも速く、結果的に一着がついて回る。

鍔迫り合い、と言われるような勝負はなかつた。独走とは言わないが、ミホノブルボンは皐月賞、日本ダービーともに、第一コーナー以降に先頭を譲つたことは一度もない。

影すら踏ませぬ、常に誰よりも先の景色を見る彼女は、後ろを見たことがない。

だから、彼女は知らなかつた。

極限までそぎ落とした身体に鬼が宿る。その段階を見逃した。

2週目の3コーナー手前。ちょうど、スタート地点を踏んだところで、ミホノブルボンは圧し潰されるような気迫に気がついた。

あまりにも静かに、ミホノブルボンの足音と息遣いに消えるほど静かに、鬼気迫る。

『ミホノブルボン、快調に飛ばしていく中、ライスシャワー！　ライスシャワーが今も食らいつく！　レースはもはや二人の独走状態！　後ろのウマ娘たちは差し返すことができるのか!?』

ライスシャワー。追いつき、食らいつく。執念にその身をやつす黒鬼が、ミホノブルボンのすぐ後ろにぴたりとついて離れない。（ラップタイムの更なる上方修正——問題ありません。加速します）

まとわりつくような重圧から逃れるように、ミホノブルボンはその脚を爆発させる。すぐ前には坂がある。本来、下り坂に向けて脚をためるのだが。

ミホノブルボンの戦場は、まさにこの坂にある。

『ミホノブルボン！ このタイミングで仕掛けてきた！ ライスシャワーを突き放し、坂をのぼって、加速!? さらに、さらに加速する！ 上り坂をものともしない！ 坂路の申し子！ 今、その脚でターフの上を独走——』

タン、と鋭い足音がミホノブルボンの耳を射抜く。

一瞬、ミホノブルボンの視線がその音に向く。そして、彼女はどううその姿を瞳におさめた。

「——勝つ」

髪を振り乱し、漆黒の闘気を具現化したように尾を引いて。覗く片目から幽鬼の如き怪しい灯を光らせて。

黒鬼は振り上げた鉄槌を下す。

『ら、ライスシャワー！ 下り坂で風となつた！ 突き放された差を

一息に埋めて、ミホノブルボンに追いついた！』

燃えている。隣に居るミホノブルボンさえ焼き尽くす熱を力に換えて、黒鬼が並ぶ。

ターフがダートのようにさえ思える。

黒鬼ライスシャワーの気迫に、ミホノブルボンは息を呑んだ。その末脚がどこに隠されていたのか。ほんの少し脚を緩めれば、もう二度と追い抜けない。そう確信させるプレッシャーに、ミホノブルボンの尻尾が総毛立つ。

このままでは負ける。数秒先の未来、ライスシャワーの背中が見えてしまう。設定したラップタイムに従えば、確実に負ける。

『最高の走り』とは何か。

設定したラップタイム通りの走行による一着？ 自己ベストの更新？ はたまたスタミナをちょうど使い切る爆走か。

ミホノブルボンは、それらの回答を否定しない。計算され尽くした勝利というものを、彼女は正しく尊重する。

だが、ミホノブルボンというウマ娘の答えは違う。

(『全身全霊』——リミッター解除)

ミホノブルボンは、枷を外す。

ラツプタイムをかなぐり捨てる。残った力を振り絞る。計画を白紙に戻して、ただ今あるもので色をつける。

「ミホノブルボン、『飛翔』します」

その宣誓を皮切りに。

ターフという青空に、一条の星が駆け抜けた。

『ミホノブルボン！ ミホノブルボンがさらに加速！ 残り800でデッドヒートが繰り広げられる！ なんだこれは、いつたい何が起こっている!? 後ろを置き去りに、ミホノブルボンとライスシャワーの一騎打ちが繰り広げられている！』

流星に黒鬼が迫る。黒鬼が追いつく。流星がまた加速して突き放す。黒鬼が一息に差を詰める。

一步たりとも譲らない。逃げる星を鬼が追う。輝く星に鬼気迫る。『残り200を通過！ 依然、先頭はミホノブルボン！ 流星のごとくターフを駆け抜ける！ その星を掴めるかライスシャワー！ 両者の差はほとんどない！ 熾烈なデッドヒートを制するのは果たして!?』

そして。

ゴールラインに星の煌めき。鬼の一足。

後に残るのは大きな空白と、舞い踊る風だけだった。

reスタート

そのレースには、確かに彼女の好敵手たり得るウマ娘がいた。

悪鬼のごとく執念と欲望にその顔を歪め、誰よりも泥臭く戦った。星をその手におさめようと、肉体を超越した走りを見せた。

黒い鬼は、ピタリとミホノブルボンの後ろをついて離れなかつた。最初のコーナーから、逃げる背中にはりついて、ペース配分を無視した、勝利するためだけの走りを見せた。

一着以外に興味はない。

絶対に勝つんだ。

一度落ちれば、あとは急転直下を見せるだろう。開始から1200を抜けた段階で、スタミナが残つてゐる気配はない。肩で息をしてゐる。その顔を真っ赤に染めている。

そんな状態で落ちれば、半分以上残つたレースの結果など決まつている。走りきれないか、最下位に落ちる。

まさしく、背水の陣というに相応しい執念が、あろうことか鍛え上げた努力の結晶たるミホノブルボンを捉えた。

客席にまで伝わつてくるライスシャワーの気迫に、彼は息を呑んだ。その走りを注視して、目を見開いた。

ライスシャワーは、ミホノブルボンのフォームを真似ていた。もはやトレイスといつても過言ではない。いや、専用にチューニングさえされている。無茶な力を、その心意気だけで維持している。

「……すごい」

純粹に、無意識に、彼の口からそんな言葉が漏れた。

上り坂を制したのはミホノブルボンだ。そこでライスシャワーを突き放し、下り坂を滑るように疾走した。

しかし、ライスシャワーは上り坂で加速しない。スピードを維持したまま、足をためて——下り坂で爆発させ、執念の残像を残した。瞬きの間に、1バ身が縮んだ。

息を吐く間に、もう並び立つた。

その熾烈なデッドヒートに入れば、会場は湧き上がつた。もはや三

冠など知つたことか、とライスシャワーにも強い声援がついて回る。変わらずミホノブルボンの無敗の三冠を願う者もいる。

彼は見ていた。ミホノブルボンの表情に、色がついたことを。必死に歯を食いしばり、前を睨みつけて、その耳を千切れんばかりに天に突き上げ、尻尾を総毛立たせて。

ミホノブルボンは燃え上がっている。隣に立つ彼女から延焼したよう。今まで押さえつけていた燃料が、ごうごうと音を立てて燃え盛る。

「ライスシャワー」

一条の星に黒鬼迫る。

「このレース、君こそがヒーローだ」

彼の断言と同時に、決着がつく。

三着以降のウマ娘がゴールに到達するのに、7秒に近い時間を要した。10バ身なんてものではない。圧倒的な大差だ。

電光掲示板に照らされる結果。ハナ差の一着二着。

全てを見届けた彼は、その身を翻し、控室に戻つていった。

青空から照りつける太陽が、彼女たちを祝福するように輝いている。そのレースに興奮したように、秋とは思えない熱が会場に降り注ぐ。

いつそ蜃気楼さえ起きそうな熱に包まれて、未だに会場の興奮は冷めやらぬ。

(……オーダー、失敗)

青い空を見上げながら、ミホノブルボンは思い出したように現状を把握する。

10バ身差などつけられるはずもない接戦だつた。もはや、オーダーなど忘れてしまうほどの熱があつた。

(……抑制不能のエネルギーを感知)

思い出すのは、気迫を感じ取つた瞬間からの戦いだ。

誰かと競い合つたのはいつ以来だろうか。少なくとも、彼がトレーナーとしてついてからは、競い合う、という感覚を久しく忘れていた。

己との戦いに勝つことで、勝利が手に入っていた。

（これが……競争。誰かと競うということ）

勝つためには、そうするしかなかつた。勝つために、練習してきた最善を捨てなければいけなかつた。

その勝利を後押ししたのは、紛れもなく彼女の積み重ねた努力の賜物だつた。しかし、そんなミホノブルボンに食らいついたのは、勝利への執念だつた。

カタログスペックの圧倒的な優勢に、感情の手が届きかけた。いや、もしも既定路線を貫いたならば……ミホノブルボンもまた、勝利への渴望を発露していなければ。勝つていたのは……ライスシャワーだ。

ぶるり、と汗が冷えたのとは別の震えが全身に走る。
横目に黒鬼……ライスシャワーを見れば、瞳を大きく揺らしながら、それでも歯を食いしばつて震えている。

「ライスさん」

「…………？」

ミホノブルボンは声をかける。逡巡も躊躇いもない。ただ一言。伝えたいと思つたから、口を開いた。

「再戦を希望します。……また、次のレースで」

ミホノブルボンはそれ以上を口にしない。伝えるべきことは伝えた、とライスシャワーに背を向けて、ウイナーズサークルに向かう。

「…………あの！」

他でもないライスシャワーが、大きく声を上げた。振り向くと、まだ顔を青くしながら、肩で息をして。それでも、彼女はレースの時は違う、毅然とした瞳でミホノブルボンを貫いた。

「ライス、次は！ 負けません！」

続けるように。

その光景を見たミホノブルボンは、目を見開いた。

「絶対！ ブルボンさんに……勝ちましゅ！」

ライスシャワーの両の瞳に、鬼火が宿つた……かのように見えた次の瞬間。彼女はセリフを噛んで、気迫をぱひゅん、と間抜けな音を立

てるようになに霧散させた。

幽鬼を思われるそれから一転、可愛らしい少女の顔が転げ出る。疲れとは別に顔を染めて、はうう、と弱々しい声を漏らして俯いた。

ピコン、とミホノブルボンの耳が立つ。尻尾が揺れる。

対照的に、ライスシャワーの耳が萎れる。尻尾が垂れる。

「……」

もふ、もふ、と。

ミホノブルボンは、ライスシャワーの頭に手を置いていた。恐る恐る、ゆっくりと、それでいて慰めるように。彼女の長い髪をそつと梳く。

「……ふえ？」

吹けば飛びそうなほど弱々しい声で、彼女はそつと顔をあげて……すぐに顔をさらに赤く染めて、一步引いた。

「……」

ミホノブルボンの手が、空中で虚しく止まる。

ライスシャワーは咄嗟のことに混乱して、目を回して、えつと、その、などと口が回らなくなっている。

「……謝罪を。先程の私の行動は、あまりに不躾なものでした。申し訳ありません」

「あ、えつと、ちがつて。その、ライス。今、汗かいてるし。突然で、驚いて。えつと、その……ごめんなさい」

そう言いながら、ライスシャワーは頭をそつと押さえて涙目になつてている。ミホノブルボンはその様子を見て、彼女と同じように耳と尻尾を垂らした。

「謝罪は不要です。これは、私の失敗です。ライスさんは悪くありません」

失礼しました、と。今度こそ、ミホノブルボンはウイナーズサークルに向かう。彼女だけの特等席で、その栄光をついに手にするだろう。

ライスシャワーは、その背中を見送った。
見送る中、その瞳に灯火が宿る。

「次は絶対に、ライスが勝つんだ」

誰にも聞こえない声で、強く宣言するのであつた。

『菊花賞の大接戦！　流星ミホノブルボンに黒鬼ライスシャワーの一騎打ち！』

後に、そんな記事が世に出回り、彼女たちの知名度は瞬く間に広まっていく。

だからこそ、後のその舞台で再戦が決まるのは必然であつた。

無敗の三冠ウマ娘ミホノブルボン。

彼女が次に目指す場所は、もう決まっていたのであつた。

ミホノブルボンが控室に戻った時、彼はスポーツドリンクとタオルを片手にそこに居た。汗を拭かせて、水分補給をさせて。それが終わってから、彼は先手必勝とばかりに口を開いた。

「どうだつた？　率直に聞かせてほしい。今回のレースのことを」

ミホノブルボンは一度、俯いて考える。

しかし、彼女は思いの外すぐに顔を上げて、まつすぐ彼の目を見て言つた。

「非常に実益の伴うレースでした」

「それは、無敗の三冠ウマ娘になれたからか？」

「否定」

バツサリと、驚くほど素早くミホノブルボンは否定する。

「彼女は、いうなれば『好敵手』と呼ばれる存在と認識。しのぎを削り、その実力を高め合うライバルを得ました」

思えば、とミホノブルボンは言葉を続ける。

「私は、競うという感覚に乏しいことが判明しました。自己ベストの更新で事足りた今までの状態は、『井の中の蛙』を体現するものでした」

思い出すように、ミホノブルボンは虚空に視線を向ける。そこに、

彼女はレース中の映像を見ていた。

「スペックにおいて、私は驕りなく『最高』の状態であつたことに間違

いありません。事前の情報と照らし合わせ、何度計算したところで、計画に則れば勝利は確実でした」

ですが、と。

ミホノブルボンは強く、確信を持ったように、彼のことを強く見つめて。

「レースに絶対はあり得ない」

そう、強く宣言した。

本当の意味で、ミホノブルボンがその言葉を理解した証左であった。

「肉体機能では説明のつかない強さを知りました。私もまた、計画を捨て去り、そんな『熱』に身を委ねて走りました。結果、計画よりも『2・31秒』早くゴールに至りました」

尻尾が揺れる。

瞳は真っ直ぐ力強い。

「ライスさんが並び立つた時、私の胸の内から『抑制不能のエネルギー』が湧き上がるのを感じしました。このエネルギーが、私に実力以上の力をもたらしました」

そこまで言つたところで。

ミホノブルボンは腰を深々と折り、頭を下げた。

「オーダーの失敗、申し訳ありませんでした」

そこからは、彼の番だった。

ミホノブルボンの言い分は聞き終えた。あとは、彼が決断を下すだけ。

彼はミホノブルボンを見る。その天に立つた耳と、さわさわと横に揺れる尻尾を見た。

「……君の言い分はよくわかった。その上で、俺はこう言わなきやいけない」

降りかかる重い言葉。どんな叱責が待っているのか。そんな未来を想起して尚、ミホノブルボンの毅然とした姿勢は揺るがない。耳が垂れるが、尻尾はピンと立たせて振舞った。

「——よくやつた」

耳が立つ。

尻尾が天をつく。

ミホノブルボンの頭に乗った手のひらから、温もりが染み渡るよう
に伝わつてくる。

「白状しよう。今回、俺に君を勝たせることは無理だと、確信して
いた」

「……」

首を横に振ろうとするも、落ち着けるように手のひらが頭の上を優
しく跳ねて抑制される。それを合図に、ミホノブルボンは聞きに徹す
る。

「ライスシャワーだ。彼女は、君のスペックを超えてくる。その精神
が肉体を超越し、必ずやこのままの君を食い破る。そこまでは確信し
ていた」

彼は頭から手のひらを引くと、膝を折り、ミホノブルボンと視線を
合わせる。

「俺には、君を説得する術がなかつた。俺がそういう風に育ててし
まって。示せるデータは根拠に乏しかつた」

そして何より、と。

彼は青空のような瞳を見つめて、真摯に答えた。

「君自身が気づくことが、このレースの鍵だつた。自分で気づかな
きや、意味がない」

そして彼は、^{こうべ}頭を垂れた。

「どんな罵倒も受け入れる。頬を張られようが、蹴られようが、構わな
い。君との秘密にすると約束する。こんな俺に失望したのなら、契約
を打ち切られるのも、仕方ない。どんなことも受け入れる。でも、こ
れだけは言わせてほしい」

——非力なトレーナーで、ごめんなさい。

拳を握り、震えながら、彼は絞り上げるようなかすれ声になつて、そ
う口にした。

「……」

「ぶん、ぶん、と空気が唸る。

ミホノブルボンは彼の頭頂部を見つめてしばらく、固まっていた。
ぶおん、ぶおん、とウチワで扇いだような風が巻き起つた。

「……顔を上げてください」

静かに、彼は顔を上げてミホノブルボンの目を真っ直ぐ見た。

——風が更なる唸りを上げる。

「今のがあるのは、マスターの手腕によるものです。マスターによつて鍛え上げられた基礎スペックがなければ、ライスさんと『競争』にさえ成りえなかつた。その土台の構築は、他ならぬマスターの的確な指導があればこそ賜物です」

いつもの無機質な瞳が、今は一段と冷たく映る。

「マスターの選択は『最善』であつたと判断します。その選択に、私は『応えました』。つまり、メインオーダー『バグの消去』を達成した、ということです」

ミホノブルボンはそこまで言つたところで、立つてください、と彼に促した。

静かに立ち上ると、今度はミホノブルボンが彼を見上げる形だ。風を切る音が、よく聞こえる。

「私は、私の目標『三冠ウマ娘』になることを達成しました」

そして唐突に、そんなことを言つてのける。

突然のことには困惑した彼に、ミホノブルボンは言葉を重ねる。

「加えて、私はマスターからのメインオーダーを達成しました」
結果を口にする。それに、彼はしつかりと頷く。事実であると首肯する。

「……」

しばらくの沈黙の後、また風が唸る。

「私は無敗の『三冠ウマ娘』になりました」

夢が、現実になつた。

その言葉を改めて聞いて呆けるほど、彼も鈍くはなかつた。

「……ミホノブルボン」

「はい、マスター」

あまりにもあつさりとした皐月賞。

計画通りの日本ダービー。

そして、大番狂わせ、死力を尽くした菊花賞。
間違いなく、ミホノブルボンはウマ娘の歴史に名を刻む存在となるだろう。

そんな功績に掛ける言葉は、一つしかない。

「おめでとう。君は、最高のウマ娘だ」

「はい。そして、最高のウマ娘たる私を育て上げたのはマスターです。つまり、マスターは私にとって『最高のトレーナー』であることに、間違いはありません」

「……！」

その言葉に、ジンと鼻の奥を熱が突く。

彼は拳を握り、目力を入れたつもりになつた。下がつたまなじり、瞳は垂れて、口は一文字に結ぶ。それもすぐに、何とか切り替えようとして、口を開く。

「何でも言つてくれ。君の結果に、俺は報いたい」

「それでは、これからもより一層厳しく、ご指導ご鞭撻のほどをよろしくお願ひします」

「……それは、こつちからお願ひしたいくらいだから。個人的なお願ひでもいいんだ」

「……リクエスト承認。しかし、こちらからのレスポンスには時間を要します。期日は未定。つまり、『個人的なお願ひの権利』の執行は『保留』となります」

「そうか。うん、わかつた」

彼はミホノブルボンに手を差し出した。

ミホノブルボンはその手を見て、彼を見た後、しつかりと彼の手を掴んで交わした。

「これからもよろしく」

「よろしくお願ひします、マスター」

パタ、パタと音を響かせながら。

二人は大一番を超えて、新たな舞台へ向けてスタートを切るのであつた。

好転一息

メタリックカラーのトランクの中身は、非常に簡素にまとまつていた。

必要最低限の衣服類に、ハンカチ六枚、ポケットティッシュが4束2セット。ハンドタオルが四枚。自前の歯ブラシに歯磨き粉。旅行先のマップが一冊。時刻表が一冊。念のための包帯が1ロールに、絆創膏が一箱。メモ帳一冊にペンが一本。折りたたみの傘が一本。10枚入りのビニール袋を1セット。あとは現金、携帯などの必需品。カメラもなければ、オーディオプレイヤーなどの機械類は微塵もない。あつて携帯の充電器程度だ。一目見れば、何がどこに入っているのかわかるほど物が少ない。

「……ミッショング発令。留守を一任します」

そう言つて、自室のベッドの上にうさぎの人形を座らせて、彼女は部屋を後にした……前に、振り返つてその姿を確認してから、今度こそ部屋を出る。

「権利執行。オペレーション『慰安旅行』、開始します」

ピコン、ピコンと耳を跳ねさせながら、彼女は寮を後にした。

新幹線に乗つている時、彼は膝下にメモと資料を広げながら、イヤホンをつけて携帯で動画を見ていた。

何かをメモしながら、何度も動画を見返して。切先のように鋭くなつた瞳を、画面の中に落としている。

「……」

ミホノブルボンが横から覗き込むと、それは去年の有『font: u140』馬『font』記念の映像だ。歴戦のウマ娘たちの中で、そのウマ娘は疲れ知らずに、爆速で駆け抜ける。まるで逃げウマのよう立ち位置で、終盤には更なる加速を見せて……後ろから差し込むウマ娘から何とか逃げ切り、ハナ差で一着になつた。

映像が終わつたところで手元のメモに視線を落とすと、仕掛けるタイミングについての図解がされていた。想定された3人分の姿。誰

がどこで仕掛けるのか、仕掛けたらどうなるか。それを彼はメモの中に落とし込んでいる。

「……」

ちょい、ちょい、とミホノブルボンは彼の袖を摘んで控えめに引く。彼は一度、ミホノブルボンに視線を向けると、片耳のイヤホンを外して「何かあつた？」と口を開く。

「データの視聴許可を求めるます」

「ん、わかつ……あ、うーん、あー……」

彼はミホノブルボンの要求に頷きかけたところで、彼女の方を見て、外したイヤホンを見て、もう一度彼女のことを見た。
「……ちょっと近くなるけど」

「構いません」

「耳を触るけど」

「問題ありません」

すっぱりと言い切られれば、彼も断る理由がない。彼はミホノブルボンの方に体を寄せ、ミホノブルボンもまた彼の方に体を寄せる。

肩と肩が触れ合う距離。彼は片方のイヤホンを手に、ミホノブルボンの耳に押し当てる。

その無表情と淡々と厳しすぎるトレーニングをこなす姿から、恐怖を込めてサイボーグなどと言われるミホノブルボンは、その呼び名に反して機械音痴である。

その程度は、ボタンを押すだけで自動販売機を壊すという、ある種ホラーの領域に足を踏み入れるほどのクラッシャーだ。本人もそれを自覚しており、自販機でものを買うときに誰かにお願いをしなければいけない程度に不自由している。

携帯を触れば通信障害が起こり、イヤホンに触れば音が聞こえなくなることは想像に難くない。

だから、スマホもイヤホンも彼が持つ必要がある。人間用のイヤホンは、ウマ娘には少し小さい。押さえていなければボロリと落ちる。

彼は右手に携帯を持ち、左手でミホノブルボンの耳にイヤホンを押し当てる。そこから手を離すことはできそうにない。

「……」

身を寄せ合つて、二人は一つの携帯を共有する。同じ画面に視線を落とす。同じ音に耳を傾ける。

時折動く、ふわふわしながら暖かい耳が、彼の手に当たる。当たるたびに、彼は少しだけ自分の手の位置を変えて……それでもまた、耳は当たつて。

次の動画に移る頃には、彼の手には布団よりもずっと暖かく柔らかい耳がピタリとはりついた。彼もそれ以上は手を動かさず、ただ彼女の耳にイヤホンを固定することに注力する。

「……」

二人は口を開かない。

ただ、同じ時間を共有するのであつた。

予約していた旅館の自室に荷物を置く。それだけ終えれば、彼とミホノブルボンはまた合流して、市街地へ繰り出した。

珍しいものは多い。一風変わった街並み、などと他所者特有の単純な感想が彼の頭に浮かぶ。

物見遊山に視線を泳がせるよりも、視線は度々隣に向いた。ミホノブルボンは観光名所の説明を、記録された館内アナウンスの如く淡々と口にする。よく勉強してきたのか、耳を尖らせながら彼女の口はよく回る。

そんな専用ガイドに相槌を打てば視線が交わる。その度に、ミホノブルボンは満足そうに頷き風を扇ぐ。

「次に、この建物は——」

時折、彼が生徒になつた気持ちで聞いてみれば、彼女はその瞳の奥にきらりと星を宿して、説明口調がよく回る。風もよく吹き、彼の方によく耳を傾け忙しない。

そんな姿を目の当たりにすると、『社会性』とは何だろうか、と彼は思わず首を傾げる。そんな彼に気付けば、補足とばかりにミホノブルボンがよく喋る。口数が増えるほど、他の動きもよく増えて、風もより強くなる。

それがどうにもおかしくて、彼は笑いを堪えながら、ミホノブルボンの説明に耳を傾けるのであつた。

観光が一通り終わつて旅館に戻ると、各々の自由時間が始まつた。外に繰り出すのも良し。風呂に入るのも良し。その折に、彼は改めて外に出る。ミホノブルボンにメッセージで連絡は入れて、観光地向けの露店や、その土地特有のお土産品を見て回る。付き合いのお土産に目星をつけると、彼はまた別の目的ですぐりと店を闊歩する。

そんな静かで、間延びした時間を彼はよく好んでいた。時間にして一時間ほど、ちょうど夕食時に彼が旅館の自室に戻った時。

「マスター、おかえりなさい。そろそろ夕食時とのことで、女将さんに案内を受けました」

彼の部屋の中には、既にミホノブルボンが待機していた。男女といふこともあり、部屋は別でとつていたが、食事だけは同じ部屋で、と旅館側に注文をつけたことを思い出す。

ミホノブルボンは、風呂上がりなのだろう。頬やその肌は健康的に上気し、腰には届かない長髪はまだ少し湿つている。備え付けの部屋着か、椿の柄をあしらつた空色の着物は、彼女の物静かな様子とよく似合つている。肌寒いのか、その上から若草色の羽織りを着ている。

「ああ、ただいま。着物は自分で着たの?」

「否定。自前の部屋着を用意していましたが、女将さんのご厚意によつて着付けをしていただきました」

「……そつか。じゃあ、ちよつと待つてて」

買つてきたものを荷物の近くに置きながら。彼は荷物の中からドライヤーを取り出し、木製の机の前で正座しているミホノブルボンの隣に移動する。

「風邪ひくから。髪触つても大丈夫?」

「はい」

ミホノブルボンはドライヤーという機械を手に持てない。

だから、今回は彼が代わりにやる必要がある。ドライヤー片手に、もう片方の手はその指を櫛のように使い、髪を乾かしていく。ゴオ

オ、とドライヤーの駆動音が部屋の中によく響く。それ以外の音は、夜の帳でも降りたように聞こえない。

普段から手入れは完璧なのだろう。髪に引っかかるようなところはなく、するすると指が通つていく。絹よりも柔らかく、肌触りの良い髪からふわりと、暖かくもスッと肺まで透き通るような匂いが鼻孔をくすぐる。

「熱くない？」

「問題ありません」

まるで人形の手入れでもしているような光景だ。微動だにせず、凜然と座る彼女の世話をする彼は、さながら召使いか。

そうして髪を乾かし終われば、彼はドライヤーをおさめて、先ほど買つたばかりの包みを二つ、ミホノブルボンに手渡した。

「ちょうどいいかな。本当は旅行が終わつた後に渡そうと思つてたけど。君にこれを」

「……」

ミホノブルボンはそれを手にすると、いつもの調子で、しかし瞬きを忘れた様子で固まつた。再起動したのはパチクリ、と二回の現状確認を終えてのことだ。

「ありがとうございます。すぐに拝見してもよろしいでしょうか」「うん。今すぐに役に立つと思う」

彼女は包みが破れないように丁重に取り扱うと、一度呼吸を置いてから、その箱を開けてみせた。

「……、『つげ櫛』、でしょうか」

「うん」

メトロノームのように、パタ、パタ、とリズムが刻まれる。ミホノブルボンはその『つげ櫛』にジッと視線を落として、しばらくの間、口をつぐんだ。

次に、彼女は恐る恐る、といった様子で慎重に、コマ送りのようにゆっくりと両手で櫛を持ち上げる。親指で手触りを確かめ、櫛の歯を指の腹で確かめて。

ミホノブルボンは、確かにその口元をほころばせた。

「ありがとうございます」

「うん。でも、まだもう一つ残つてるよ」

「……」

もう一つ。細長い箱が綺麗な包装紙にくるまつていてる。

ミホノブルボンは何度か、その箱と櫛へ交互に視線を向けた。それが何周目かしたところで、彼女の耳が天をついた。

「権利執行を求めます」

「……え、ここで？」

目を白黒させる彼と対照的に、ミホノブルボンは「はい」と落ち着いた様子で頷きながら、よく風とリズムを刻んでいる。

「この『つげ櫛』を使用し、私の髪を梳いてください」

「……えっと。やつたことないし、きっと下手だよ」

「先ほどの手櫛の手腕から、問題ないと判断しました。よつて、私の意思は変わりません」

どうしたものか、とミホノブルボンを見るも、その瞳は固く揺れ動かない。それを見ただけで、彼はおどけるように両手を挙げて頷いて見せた。

「わかつた。ご指導の方、よろしく」

「はい」

『つげ櫛』を受け取ると、彼はミホノブルボンのすぐ後ろに陣取り、倣うように正座で落ち着く。その膝の上に、すかさず彼女の尻尾が落ち着いた。まるで定位置だ、といわんばかりの早業に、彼は苦笑をこぼすしかない。

そして、すつ、と『つげ櫛』が彼女の髪を梳き通る。地肌に当てず、左手で髪を掬つて右手の櫛を通していく。規則的に、心地の良い櫛と髪の擦れる音が、部屋の中を支配する。

しばらくの間、少女はそんな時間に身をゆだねた。目を閉じ、耳を折り、髪の毛に通つていく指と櫛の感触をよく確かめる。

ふと、目を閉じていたことを自覚したミホノブルボンは、まだ指と櫛の感触が伝わつてくるのを確認すると、思い出したようにもう一つ

の箱に視線を向けた。

そして、『つげ櫛』が入っていた箱と同じように、包装紙を破らないように取り外す。箱のふたに手をかけて、壊れモノでも扱うように慎重に持ち上げると――

「……」

ミホノブルボンは、その中身を見てフリーズした。

ふたをとつた体勢のまま、しばらくが経つ。髪を梳くので手一杯なのか、彼がそのことに気付いている様子はない。

箱の中身は――簪かんざしだった。

六花をあしらつたとんぼ玉が先についた、簡素なもの。値段もきっと、高すぎるものでもないだろう。

とんぼ玉には、冬の世界が広がっている。

雪原を思わせるような、澄み渡つた青と白の色合いが、とても美しい。騒がしさはなく、ただ静かで美しい世界が、そこに描かれている。

「……」

それを、ミホノブルボンは手に取れなかつた。冬の景色に霜がつくのを躊躇つたためだ。その思い出に、綺麗なままでいてほしいと、どこか心の隅でストッパーが働いた。

「……マスター」

「ん、どうしたの」

箱のふたを机の上に。彼女の視線は、冬の景色に集まつた。

「私は年末、実家への帰省を予定しています。幼い頃からの夢を叶えたことを直接、両親に報告しようと。……もし、都合がつくのであれば」

息を吸う。耳が斜めに立ち上がる。

冬の景色。そこに、家族の絵を浮かべたミホノブルボンは、喉に詰まつたその言葉を口にする。

「マスターにも、同行していただきたいと。そう、考えています」

言い切つた。そのことに、知らずと上がつていた肩が下がつていくのを感じる。

「そうだね。行こうか」

そんなミホノブルボンの気持ちを知つてか知らずか、彼はあまりに
もあつさりと、頷いて口にした。

驚きに、尻尾が思わず跳ねて彼の腹部を撫でた。

「俺も、君のご両親には挨拶を、と思っていたから。ちょうどいいか
な」

「……12月30日に出発を予定しています」

「有『font:u140』馬』記念の後だし、それで行

こうか』

「はい』

すつ、と梳かれる音が。

静けさに包まれる部屋の中へ、顔をのぞかせるように響いた。

彼のすぐ目の前にいる少女は、雪景色に想いをはせる。

とんぼ玉の中に映つた六花は、雪解けを告げるよう、新しい花を
咲かせた。

30枚目 二の矢を番えて急ぎ足

「あ、ししょー！」

その元気な声が響いたのは、有マ記念に向けて、ミホノブルボンと最終調整に入っている時だった。

桜色の尻尾を二つ靡かせて、体操着に身を包んだ少女が、彼との距離を瞬く間に詰めた。目を向けた瞬間には、もう目の前に立つている。

「ウララ？ 戻つてたのか」

「うん！ だつてだつて、もうすぐ有マ記念でしょ？ だから、しそよーとトレーナーに一度会いたいなーつて！」

『チャンピオンズカップ』はどうしたんだ？」

「今年は有マ記念に全力だからね！ だつて、ししょーとトレーナーも、本気なんでしょ？」

「本気だよ」

「なら、私もちよーセイ？ やろうかなつて」

彼は頭をかいて、一つ息をついた。どういう言葉をかけようかと、息を吸いながら考えていると。

「マスター、ノルマを達成しました」

「ん？ ああ、じゃあ次は——」

「あ————つ！」

ハルウララの大声に、彼の声は遮られた。そして気づいた時には、目を輝かせた彼女はミホノブルボンの前に、風を置き去りにして立っていた。

ミホノブルボンは、あまりの勢いのせいか。一步だけ後ろにひいた。

「ね、ね、ししょーの教えを受けてる子だよね!?」

「……そちらの男性があなたの『ししょー』に該当するのであれば、その通りです」

「わ、やっぱりやっぱり！ じゃあ、有マ記念で競争だね！ 私、負けないよ！」

ふんす、と鼻を鳴らして両の拳を握る。ハルウララの宣言に、ミホノブルボンは首を横に振る。

「勝つのは私たちです」

彼女は強く、ハルウララを見つめた。

「うーん……あっ、そうだ！」

いいこと思いついた、と頭の上に電球でもついたように、その顔にパツッと花開く。

「今からレースしようよ！ 私、走りたくってウズウズしてるんだー！」

「いや、ウララ。それは」

「……マスター」

彼が眉をひそめて渋ったところに、ミホノブルボンが呼びかける。「通常通りであれば、次はレース形式での走行となります。そしてその際、競争相手の存在は、より強固な経験として効果を見込めると考えます。……つまり、ウララさんとの模擬レースを希望します」

「……うーん

困ったように、低い声を漏らしながら頭を搔いた。彼はそこからすぐ息を吐くと、わかつたと頷いてみせる。

「なら、今回はラップタイムを意識するように。目標タイムは2分28秒。競争というより、自己ベストと戦うんだ」

「……はい！」

ミホノブルボンに指示を飛ばせば、彼女はピンと直立して声を張り上げる。そしてすぐに身を翻すと、スタートラインの方に向かっていった。

「むー……しょー、私が負けるって思つてるでしょ？」

「いつも通りになると思つてる」

「いいもん。ここで勝つて、しょーをびっくりさせるから！」

そう言うと、ハルウララはその身を翻しスタートラインの方に駆け出した。快調な様子で、その瞳と身体に力をみなぎらせ、小柄な少女はターフの上に立つ。

「……ウララだしなあ」

彼はひとりゴチると、肩を落として同じくスタートラインに向かうのであつた。

「また負けちゃったー！」

悲鳴のように声を上げ、ハルウララはくるくると円をかいて頭を振つてている。二つの尻尾が勢いに跳ねて飛び、小さな獣が喰つてやまない。

「……？」

ミホノブルボンはただただ、首を傾げるしかない。それ以外にどう反応していいかわからなかつた。そして純粹に、この大差をつけての模擬レースの結果を不思議に思つていた。

「ししょー！ 私、なんで負けたんだろう？」

「練習だからでしょ」

「そうじやなくつて！ 走り方とか、ふおーむ？ とか！」

「遊びすぎ」

「えー……せつかく、はやく走れる必勝走法！ を編み出したのに」

「いつも通り走るほうが絶対速いから」

「だつてだつて！ いつものつてししょーとトレーナーのズルだー、つて言われるから……」

「走り方にズルもクソもないから。……というか、その走り方はウララにしか出来ないし。そんなの気にしないでよろしい」

彼がどれだけ宥めても、ハルウララの喉が鳴り止むことはなかつた。結局、彼女は納得しないまま。夕焼けを見て「あー！ 約束してたんだつた！ またねー！」と風のよう而去つていった。

「……マスター」

ミホノブルボンは沈黙を破つた。嵐の後、ようやく風が止み声が聞こえるようにでもなつたかのように。彼女の表情は、模擬レースが終わつてから変わつていない。

彼はそれに、曖昧な笑みを浮かべるしかない。

「ウララさんは、どうして非効率的な走りを？」

「……ウララにも、色々あるんだ。半分は俺のせい」
だけど、と。

彼は真剣な眼差しでミホノブルボンを見ると。

「レースじや別人だ。とにかく、ウララからは逃げ切れ。君の脚質じや、中盤で突き放されたら逆転はない。だから、ウララを寄せ付けるな。それくらいのリードを保つて……ゴール前の坂を突つ切れば、君の勝ちだ。登り坂で君に勝る子はいない」

「……はい」

ミホノブルボンは頷いたものの、その耳を畳んでいる。練習に戻ろうと、垂れた尻尾が芝を掠める。

「ウララに勝つたら、全て話す」

聞き逃すまい、と耳が直立する。たつたそれだけの言葉で、歩む力

が強くなつた。

「……隠し事は趣味じゃないんだ。だから、勝つぞ」

「オーダー受理。必ず遂行してみせます」

夕日が沈み切るまで、ミホノブルボンの特訓は続いた。

『勝てないウマ娘ハルウララ！ 有マ記念三連覇に迫る!!』

若氣の至りだつた。

彼は記事の一面に視線を落として息をつく。

一昨年、昨年。どちらの有マ記念の動画を見てみても、めちゃくちゃだ。ペース配分なんてものはなく、ただ走りたいように走らせる。

指示は簡単だつた。誰よりも前に行け。

それだけで、ハルウララはその真価を發揮した。落ちることなく、終始加速し続ける。動画の中で、一人追い抜きまた加速。二人追い抜き風を切り、三人追い抜き喜びからステップを踏んで外に出る。最終の坂では減速することなく差し切る。

一昨年の有マ記念。ハルウララは笑顔で走っていた。一人抜くたびに喜び勇み、その気持ちを力に加速した。

昨年の有マ記念。ハルウララは必死に走っていた。歯を食いしば

り、その瞳に闘志を滾らせ、垢抜けた様子でその威風堂々たる走りで一着についた。

最初で最後のチャンスだ。

ふと自室の机の上に視線を向ければ、まだ昔の名残が鎮座している。

何十枚に及ぶ虹の蹄鉄コインが、ウイスキーの瓶の中に入っている。夢を見ていたあの頃のきらめきは、今なお色褪せることはない。

「……勝つてくれ」

トレーナーに出来るのは、結局のところ、ウマ娘たちが万全に走るために後押しことだけ。レースに向けて、コンディションの調整に勤しむことしかできない。

それが歯痒くて、彼は立ち上がり窓から外を見た。月明かりのない空。どんよりと厚い雲が覆っているその光景を見た時、彼の口元は引きつり、咄嗟に数日分の天気を確認して……やり場のない拳が宙を切る。

「最悪だ」

有マ記念の当日。その天気は90%の雨予報。

まだ数日ある。天気がここから変わる可能性は十二分にある。天気が持ち堪えて、良バ場で迎えることはできるかもしれない。

だが、仮にも有マ記念を重バ場で迎えたとしたなら。当日に雨が降りしきつたりでもしたら。

果たして、ハルウララに勝てるウマ娘は居るのだろうか。

「……もつてくれよ」

黒く厚い雲を睨みつけながら、彼は深く息をついたのであった。

クリスマスイブ。有マ記念に参加するウマ娘とそのトレーナーは、その日をクリスマス本番のように楽しむのが通例だ。25日には荷造りがあり、26日には出発。27日にはレース本番。25日に遊ぶことは、余裕を持った準備をする上で出来ないのである。

そんな日に、彼はプレゼントを見繕っていた。同僚に渡す義理のモノと、担当する彼女に渡すモノ。あとはついでに、手土産としてちょ

うど良さそうな品の見繕い。有マ記念が終わればあつという間に年末だ。ミホノブルボンの実家に訪問する手前、時間はそれほど残されていなかつた。

「……」

ふと、デパートを巡つている折に頭の端に記憶の中の噂が過る。ミホノブルボンは尻尾の筋力だけで自分の身体を支えることが出来る、とかなんとか。

「よし」

決まりだ、と彼はようやく目的を持つて足を運ぶ。

店に入ると、店員をつかまえて希望する商品の特徴を言いつのり、紹介された商品の更に詳細な説明を聞いて、じつくりと考え込む。これだ、と決めた時には店員も困り顔だつたことに、彼は一言謝罪を入れてから、更に商品について聞き込み、商品を追加で買つていく。

そうして買い出しを終えた時には、両手にいっぱいの荷物となる。財布の中身に反比例して、両手には重みがのしかかる。彼の足を地につけるように。

紙袋の擦れる音が、喧騒の中に搔き消えた。

彼とミホノブルボン。二人専用の会議室には既に明かりがついていた。時計に視線を落とせば、まだ18時を回つていない。彼はその事実を確認して口元をほころばせると、カチャリと音を立てて扉を開いた。

「マスター、お疲れ様です。どうぞ中に」

「ああ、ありがとう」

ミホノブルボンが、尻尾を抱えながら出迎える。彼は両手に大荷物を持ちながら、先導されるままに部屋に入ると、程よい部屋の室温に包み込まれる。壁に掛けられたエアコンのリモコンを見てみれば、25℃に設定されている。机の上には孫の手が置いてあり、他には何も置かれていない。

彼は机の上に大きな紙袋を二つ置いたところで、深く息を吐く。肩を大きく回してストレッチをしているところで、トポトポ、と何かが

注がれる音が聞こえてきた。

「魔法瓶に補充していた生姜湯です。冷えの改善、脂肪の燃焼などの効果が期待できます」

「手際が良いね……うん、美味しいよ」

流し込んだ熱が喉の奥に、そして腹の中に落ちていくのを確かに感じる。体の中心から、血流が流れるようにまたその熱もよく伝わってくる。ぽかぽかと、春の陽気のような温かさが体内に巡り始める。

「コートをお預かりします」

「え、ああ、うん……うん？」

ホツと一息ついている間に、ミホノブルボンは彼の背後に立つていた。意識の隙を窺くような鮮やかな手際でコートをはぎ取ると、彼女はそれをハンガーに通して衣装ラックに引っ掛けた。

「マスターに『困惑』のステータスの発生を感じ。しかし、これまでの状況に異常は検出されません。つまり、原因不明です」

「……いや、まあ。何から何まで世話してもらうのがむず痒かつたから」

彼がそう言うと、ミホノブルボンは俯いて考えた後、困惑しているのか瞳を弱々しく揺らして「あの」と小さく声を出した。

「マスターにとつて、私の行動は『迷惑』でしたか？」

「いや、いやいや。そうじやないんだ。そうじやないから。ただ、慣れなくて戸惑つただけだ。労つてくれるのは、嬉しいよ」

「……」

どうにも早口になつて、しかしそれでも素直に気持ちを伝えれば、ミホノブルボンはその無表情の中に明るい花を咲かせた。目元が緩み、強張つていた口元が元に戻り、肩がゆっくりとおりていく。

そして、ミホノブルボンは動き出す。会議室の中央にあるテーブル。その椅子から袋を取り出すと、それを彼の目の前で差し出した。「メリーカリスマス。気持ちばかりの、プレゼントです」

メタリックカラーの、光沢のある袋だった。袋には有名な男性物ブランドのマークが入っている。彼はそれを受け取ると、「中身を見ていいか?」と断りを入れる。

ミホノブルボンは、それに力強く頷いた。

「——ネクタイ、か」

それは、鋼の蹄鉄模様があしらわれたネクタイだった。レース場に刻み付ける彼女たちの足跡の模様。『トレセン学園』に所属する人間として、つけるのに何の違和感もない。むしろ、その仕事に誇りを持つているように思われるだろう一品だ。

「以前より、マスターはネクタイのデザインに変化がありませんでした。普段の様子から、ネクタイを一本しか持っていないと推測。よつて、こちらの一品に落ち着きました」

「……ありがとう。そこまで見られていたのは、ちょっと恥ずかしいけど。大切に、使わせてもらうよ」

そう言つて箱のふたを閉めようとした彼の手を、風が掠める。
〔試着を提案します。サイズが適切か確認すべきです〕

「……」

毅然とそう言つてのけるミホノブルボンに、彼はほんの少し沈黙する。暖房によるものか、風の音が妙に響く室内で、彼は静かに息を吐く。

〔鏡がないから、別の機会に〕

「問題ありません。適正の判断において、平均よりも上であると自負しています」

「……じゃあ、任せてもいいか?」

〔オーダー承認。これよりオペレーション『プレゼント』を遂行します〕

そう言うと、ミホノブルボンは素早い手捌きをもつてプレゼント箱からネクタイを手にする。えつ、と彼が声を上げるのも構わず、彼女は「失礼します」と彼の首の後ろに手をまわした。

「……」

たじろぐ彼に構わず、ミホノブルボンはどこか手慣れた手つきでネクタイを結んでいく。結び目は綺麗な逆三角形にして、彼女は満足したように頷く。キュッと結び終えれば、ミホノブルボンは彼をジツと観察した後、柔らかく顔を綻ばせた。

「よく似合っています。……より、マスターらしく仕上がったと判断。つまり、オペレーション『プレゼント』は大成功です」

胸の前で両の拳を握つて、ふんす、と得意そうにあるいは満足そうに彼を見上げる。唸る風にウズウズと細かく動く耳。

そんなミホノブルボンを見れば、彼も言うことは絞られる。

「ありがとう」

その言葉がこぼれると、彼の顔も自然と綻んだ。先程の緊張とは一転、肩の力も抜けていく。

心地の良い沈黙がしばらく続く。

ミホノブルボンは彼のことをジツと見つめて動かない。何を考えているのか、あるいはどこか上の空なのか。彼女はマネキンのように微動だにしない。

対して彼は、贈られたネクタイがどんなものか、実際につけてみた後のデザインを観察する。それを一通り見終えた後は「そうだつた」と顔を上げて、買ってきた大袋の方に駆け寄つた。

「いつも頑張っているから。……メリークリスマス。君へのプレゼントだよ」

大袋の中から取り出したのは、それよりも小さな袋だ。ウマ娘たちの間で有名な、尻尾のロゴが特徴的な袋。

ミホノブルボンはその袋を見て、反射的に耳も尻尾も肩も跳ねさせた。

「……」

「ハードなトレーニングばかりだし、手入れのための道具は使うかなって思つたんだ」

「……開封しても、よろしいでしようか」

「いいよ」

袋の中には、それぞれ赤と緑のクリスマス仕様にラッピングされた箱が二つ。そしてラッピングされ膨らんだ包装紙が一枚。

まず、包装紙の方を丁寧に開くと、そこにはウマ娘の尻尾用のロー・ションが入っていた。女性は髪が命というが、ウマ娘は尻尾も命だ。彼女も見たことのある商品に、息をひとつ吐いて、机の上に置く。

続くのは箱の方。比較的小さい、手のひらより少し大きな箱のラッピングを、これまた丁寧に剥がして、箱の蓋を開けると。

「……鋏」

それは、ウマ娘の尻尾に特化した鋏であつた。尻尾の毛は、髪の毛に比べて幾分か固く太い傾向にある。そのため、髪と同じ鋏は使えない。強度と切れ味、共に優れたメタリックカラーのそれに視線を落として、彼女は恐る恐る指の腹で触れる。ひんやりと、冷たくもどこか暖かい感触。

袋が乾いた音を立ててその表面を揺らす。

最後に、両手で持つような箱に手をかける。壊物でも扱うように慎重に、職人のように厳かに鋭い視線を向けながら、彼女は包装のテープを一枚、一枚、綺麗に剥がす。

そしていよいよ箱が現れると、紺色の外装に銀の文字とロゴが彫られた、如何にも高級そうなデザイン。

胸に手を当て、大きく息を吸い込む。

細く、深く息を吐き切ると。

彼女は意を決して、その箱の蓋に手をかけた。

「……！」

予想通り、というべきか。

そこに入っていたのは、ウマ娘の尻尾のために作られたブラシであつた。

それらの品々を見て、ミホノブルボンは処理落ちした。瞬きを忘れて、呼吸を忘れて、ただただプレゼントを見つめてやまない。

「……」

彼は、その様子を固唾を呑んで見守っている。一体、どんな反応が返ってくるのか。

緊張して張り詰めた空気が場を支配する。

「……」

ミホノブルボンは、自分の尻尾を膝の上に置くと、その指で一度梳いてみせる。すると、どこか納得もしたように一人頷いて。

「毛並みのコンディションの『不調』を確認」

と、彼に背を向けたまま呟いた。彼にも聞こえる声で、はつきりと。

「コンディショーンの向上のため、尻尾の手入れを希望します」

ミホノブルボンはあくまで背を向けたまま口にする。

「それはダメだ」

彼も迷うことなく言い切った。

ミホノブルボンの尻尾が踊る。見るまでもなく、正確に彼の手首に巻きついた。

「30枚目を、昨日いただきました。権利の執行を希望します」

「ダメだ。それじゃあ釣り合いが取れない」

「代案を提出。有マ記念において一着となつた時、尻尾の手入れを希望します」

彼はその提案に、重く沈黙する。

しかし、どれだけ沈黙を保とうと、ミホノブルボンが退く様子は微塵もない。決意が硬いのか、張り詰めた空気が走っている。巻きついた尻尾の締め付けが、跡が残りそうなくらい強くなる。

あながち、尻尾の筋力だけで体を支えられるのも、嘘じやないのかかもしれない。

そんな感想を抱きながら、彼は重く、重く息を吐いた。

「わかった」

その瞬間。

ミホノブルボンの尻尾は、彼の手首からするりと離れる。

代わりに、風を切る。耳が動く。

そして、陽炎が立ち込める。

「契約、確認。言質はどりました」

彼女はしばらく、振り返ることはない。

それでも、プレゼントを再び袋の中に仕舞い込むと。

いつものミホノブルボンに戻つて。

それからは、二人で小さなクリスマスパーティーと洒落込んで。

二人は、その日を迎えるのだ。

瞬きのスピードスター

雨音に負けない喧騒が、有マ記念のレース場を包み込む。

生憎の重バ場に強い雨。濡れた芝は雨の重みに耐えかねたようにな鎌首をもたげる。レーン内側はぬかるんでおり、力強く踏み込めるようなバ場ではないことは明らかだつた。

「……正直、こんなことを言うのはどうかと思うけど」

控室の中まで聞こえてくる熱狂と雨音。

そんな環境音がないかのように振る舞いながら、彼はその重い口を開いた。

「ウララに勝つのは難しい」

ミホノブルボンは、その言葉を聞いても、特に口を開くことはなかつた。代わりに、その耳が天をついた。

「ウララの主戦場はダートだ。荒れた足場こそが、あの子が全力で走れる場所だ。君にも重バ場の特訓はさせたけど、文字通りレベルが違う」

片やダートを主戦場とするウマ娘。

片や芝の万全なコースを今まで走つてきたウマ娘。

加えて、ハルウララはミホノブルボンより一年……レース出走数においては、20倍近くの経験値の差がある。

「だけど、スタミナだけなら誰にも負けないくらい鍛え上げたつもりだ」

トレーニングに裏打ちされた実力は裏切らない。今まで培つてきた力は、たしかにミホノブルボンに備わつていて。

「大逃げしてこい。誰の手も届かないほど先で一着を掴め」「……マスター」

ミホノブルボンは、頷くでもなく感動したわけでもなく、呼びかけるように彼に声をかける。

「本当に、それでいいのでしょうか」

「……え？」

彼は柄にもなく、素つ頓狂な声が口から漏れ出る。ミホノブルボン

のはじめての反発に、空いた口が塞がらなくなる。今まで一度もなかつた事態に、こぼれそうなほど目を見開き丸くする。

「私はマスターと共に、去年、一昨年。数々の重賞レースの動画を視聴しました」

それは以前、旅行の時の話だ。

菊花賞が終わつた後、彼はしきりに去年と一昨年の重賞レースの動画を見るようになつた。

これに釣られて、ミホノブルボンも時間を共にするように視聴した。視聴してきた。そして先日、ハルウララと一緒に走つてたからこそ。

「私はウララさんのレースを見て……一昨年の方が『恐ろしい』と感じました」

ミホノブルボンはその事実に気がつくことができた。

「ウララさんは一昨年のレース、終始笑顔で走つていました。疲れた様子はなく、ただ『楽しそう』に走つていました」

しかし、とミホノブルボンは言葉を続ける。

「昨年のレース、ウララさんの表情は険しいものでした。……周囲のレベルが上がつた、という状況は否定しません。それでも、走つているウララさんはどこか……『苦しそう』でした」

ミホノブルボンはジッと彼のことを見つめる。

彼は、彼女の視線から逃れるように目を瞑つた。

「よつて、提案します。大逃げではなく。いつも通りの『逃げ』を以て、必ず一着をとります。……マスター、作戦変更の許可を」

しばらくの沈黙が、控室の中を包み込む。

ミホノブルボンはスッと姿勢を良くして動かず、彼の言葉を待つ。どれだけ待とうと構わないと、そんな強固な意思が垣間見える佇まい。

彼は目を開けて、そんなミホノブルボンの姿を見て、重い口を開いた。

「……君は、わかっているのか？」

「はい」

ミホノブルボンは短く肯定した。

「君はつまり、ウララに真正面から競り勝つ。そう言っているのを、理解しているのか」

「はい」

一切の迷いなき返答だった。

ミホノブルボンの無機質な表情。しかし、その瞳の中には、闘志が色をつけて燃えている。

「元より、私の脚質は『逃げ』に適したものであり、『大逃げ』にはやや不向きです。加えて、この雨もあり、平時よりもスタミナの消耗は激しいと考えます。しかし、ゴール前には急坂があります」

つまり、とミホノブルボンは平坦に見えて、その実力強い視線を以つて締め括る。

「急坂まで先頭をキーし、急坂を以つてリードを開き、ゴールに到達します。マスターに鍛え上げられたこの脚であれば、必ず成し遂げられます」

ミホノブルボンは、発言に一切の迷いを見せない。意思も固まっているのか、瞳も表情も揺らがない。凜然とした様子で、彼の返答を待つている。

「必ず、か」

「はい」

彼女にそこまで言わせるのは、一体何なのか。

ハルウララへの対抗心か。積み上げてきた努力に裏打ちされるものか。はたまた実力を冷静に分析した結果か。

「ウララは強いぞ」

「はい」

「俺たちの全力の一年の結晶が、ハルウララだ。君を手がける前から、ハルウララには『誰も勝てない』と言わせしめた。不敗伝説を打ち破ると。そう言うんだな?」

「不敗の称号を引き継ぎます。マスターの担当ウマ娘は、このミホノブルボンです」

「……言つたな?」

「はい」

毅然とした態度。

そんなミホノブルボンの様子を見た彼は、天を仰いだ。ああ、と声を漏らして、彼はどこか遠くを見つめていた。

彼は、ゆっくりと頷いた。

「行つてこい、ミホノブルボン」

「はい！」

控室を出て、お互に背中を向ける。彼は客席、彼女はコースへ。

降りしきる雨の中でも、観客席は人で溢れかえっている。今年最後の大一番と言えども、異常な集客を見せたのは、あらゆる要素が噛み合つてしまつたからだ。

『さあ、年末最後のレース有マ記念！ 有終の美を飾るのは果たして誰か!?』

誰が勝つか。声に出さずとも分かりきつていると、不気味な静けさが会場を包み込む。

『3番人気の紹介です。2番ライスシャワー。菊花賞では、まさしく鬼のような走りを見せてくれました。果たしてその脚で栄光に辿り着けるのか！』

そんな煽り文句を言つておきながら、息をつく間も無く言葉を続ける。

『2番人気はこのウマ娘！ 無敗の三冠ウマ娘、7番ミホノブルボン！ 伝説を打ち破り、新たな無敗の王者となることは出来るのか!?』
そしてそして、と実況のテンションが一息に上がる。

『1番人気はやはりこのウマ娘！ ここまで重賞レース113連勝中のスタートだ！ この子に敵う子は果たして現れるのか!?』
ドツ、と割れんばかりの歓声がレース場を震わせる。その圧倒的な声援は、ハルウララの実績に裏打ちされた、その成果に相応しいものだつた。

しかし、ゲートの中にいるウマ娘は手慣れているのか。あるいは集

中していく気にならないのか。誰もそんなことでは揺らがない。

いつそ陽炎が立ちのぼるかというほど、不気味な気迫が圧縮されている。

『間も無くレースが始まります——ゲートイン完了、出走の準備が整いました』

そんなアナウンスと共に、会場の声援は徐々に凧へと至る。そうして完全に静まり返った時。

——パン、とゲートが開き。

二人のウマ娘が、風雨を切り裂き前に前に閃いた。

『さあ始まりました！ 先頭、早くも駆け出したのはミホノブルボン！ それに追従するのはライスシャワー！ 先頭争いはこの二人だ！ 一番人気ハルウララ、内へ内へと寄つていく！』

解説を聞いた途端、ミホノブルボンは後ろの様子を窺つた。彼女にピタリと張りつこうとするライスシャワーに、他のウマ娘に抜かれて後ろ、後ろに追いやられていくハルウララ。

ハルウララの走りを視聴してきたミホノブルボンからしてみれば、それはあまりにも不気味であつた。まるで逃げのような立ち位置から終始加速し続ける。大逃げをしよう、とでも言わんばかりの走りを、無尽蔵のスタミナから繰り出す。それが、ここ一年のハルウララの走りだった。

だが、今の彼女の立ち位置はまるで逆——これでは、「追込」ではないか。

『一番人気ハルウララ！ なんと最後尾についた！ これは何かの作戦でしようか？』

『まるで一昨年の有馬記念を彷彿とさせますね！ その時の彼女の作戦に酷似しています！』

しかし、だからといってミホノブルボンがペースを緩めることはない。機械的にラップタイムを刻み、差を開くだけのこと。

『先頭から最後尾まで1.5バ身！ 非常に縦長の展開。先頭ミホノブルボンは快調に差を広げていますが、これは正解でしょうか？』

『ミホノブルボン、彼女の脚質には合っていますね。その後ろのライ

スシャワーの追従する力も、目を見張るものがありますよ!』

「……!」

すぐ後ろから、押し潰されそうなほどの一撃がピタリとついて離れない。どこまでもついていく、という覚悟が、雨粒さえ熱く感じるほど伝わってくる。

(ラップタイムの修正……不要。脚を溜めます)

前回と同じ轍は踏まない。追従する力、最後の爆発力。ライスシャワーの武器は、その脅威的な覚悟と根性から来る底力だ。どれだけ突き放そうとしても離れず、最後に必ずその末脚を発揮する。

前回勝てたのは、ほんの少しだけ。それこそ天運とも呼べる微量な差が、天秤をミホノブルボンに傾けただけのこと。

(……ラップタイム、誤差なく達成。しかし、スタミナの消費は1・3倍に増加)

何より、これ以上ペースを上げては『大逃げ』のような走りになってしまう。ただでさえバ場状態が悪く、踏み込みに足を取られそうになる状態だ。そんな走りをしては、ミホノブルボンと言えども最後まで脚を残すことが出来なくなってしまう。

(つまり……このまま押し切ります)

条件は一緒。ならば問題ない、と前を見据えた時だつた。

わあっ! と歓声がコースを震わせた。

『ハルウララ!? ハルウララが上がってきた!』

「……!」

早い、と咄嗟に末脚を炸裂させそうになつて、すぐに息を吐き出し冷静さを取り戻す。

『すごいすごい! ハルウララ、一人、また一人と抜いていく! 残り2000もある中で、もうスパートを掛けてきた! いや、この距離はもはやスパートなのか!?』

『仕掛けてきたことに間違ひ無いでしょ! ここから展開が一気に変わりますよ!』

(計算開始。ウララさんのスピード、スパート距離と、現在のバ身差、私のラップタイムから、1バ身差になるまでに掛かる時間は……?)

後ろを窺うと、その瞳にどろりと執念を宿したライスシャワーと目が合つた。

——逃がさない、と。

力強く、ミホノブルボンのことを見据えている。

(……予定に変更はありません。突き進みます)

一度目の上り坂。ミホノブルボンは得意とするそこでバ場の影響を確認しながらギアを上げる。強く踏み込み、しなやかなバネを駆使して一息に上り坂を駆け抜けた。

『やはり坂路はこのウマ娘の独壇場か！ 急坂をもつて後続とさらに2バ身の差をつけた！ しかしライスシャワーも食い下がる！ 逃げるミホノブルボン！ 追いかけるライスシャワー！』

気を抜けば、濡れた芝に脚を滑らせる。いつも以上に器用に、鋭く、深く踏み込む。整地された芝を抉り取るほどの力。

それだけ強く踏み込みながら、ミホノブルボンは流水の如く身体を傾けてコーナーを曲がる。完璧とも言えるコーナリングに、またも差が開くかと思えば。

ミホノブルボンは見た。

ライスシャワーが、流水の如く自然なコーナリングを見せる瞬間を。

(……警戒レベル上昇。次の直線、1ハロン1・2秒短縮し駆け抜けます)

次の直線には下り坂がある。坂路全体が得意なミホノブルボンと言えども、下り坂においてのみは、ライスシャワーに軍配が上がる。事前の計算よりも差をつけられなかつた。逃げ切るために必要なことだと、彼女は即座に割り切つて――

雨のカーテンを切り裂き、一条の星となつて直線に閃いた。

『ミホノブルボン！ 中盤で仕掛けてきた！ その末脚を開放して勝負に出た！ しかし、食い下がる！ ライスシャワー、意地か根性かピタリと距離を保つて離さない！ 今日こそ星を掴むというのか!?』しかし、その軌跡を塗りつぶすのは黒い影。まるで、既にその星を掴んで引つ張られているかのように、決して離れようとしない。

『ああつと！ 一番人気ハルウララ！ とうとう三番手まで駆け上がった！ まだだ！ まだグングンと加速している！ 青天井のスタミナで、ターフの上を駆け抜けていく！』

「……！」

早い、とミホノブルボンは坂を下りながら、その勢いに乗ってさらに加速する。その瞬時の判断がよかつたのか、それとも関係ないのか。

『先頭は変わらずミホノブルボン。2バ身後ろにライスシャワー。6バ身、いや5バ身離れてハルウララ、この位置についている。1バ身開いて――』

先頭だけは守っている。

ミホノブルボンの鉄壁にして、最初で最後の牙城。守り切ることが勝利につながる先頭争いという名の攻防戦。

バチヤン、と後ろからターフの水気ごと抉り取る音が聞こえた。

同時に、会場が震えて沸き上がった。

『ハルウララさらに加速！ 先頭との距離を瞬く間に縮めていく！ 雨もバ場も物ともせず、その末脚を爆発させる！』

『ハルウララ、彼女の脚なら、ここからが正真正銘のスパートですよ！

前の二人は逃げ切れるのでしょうか!? そして、後続のウマ娘たちは間に合うのでしょうか!?』

（残り距離1000……ウララさんのロングスパート開始は残り2000から。次点加速地点は恐らく1500。つまり、ラストスパート開始地点は――）

――残り500こそが、分水嶺となる。

ミホノブルボンの独壇場は残り300の急坂からだ。その間200の攻防戦において、先頭を守り切ることがマストとなる。そこを超えた時、ようやく勝利の栄光を掴むことができるのだ。

ミホノブルボンは迷わなかつた。

5回目のコーナーで、彼女は前傾姿勢に移ると。

「――ッ！」

思い切り息を吸うと同時に、流星の如き閃きをもつて——コーナーに軌跡を残した。

『ミホノブルボンッ！　ミホノブルボンが残り800でスパートをかけた？　速い、速い！　末脚を出し切る勢いだ!?　その様はターフを駆ける流れ星！　流星ミホノブルボン、後続を突き放す——いや!?』

会場が震えに包まれる。

まるで嵐に晒されているかのようなレース場の中を。

『ハルウララ！　ハルウララが上がつてきました！　ライスシャワーを追い抜いてハルウララがミホノブルボンの後ろにつきました！』

風に乗つて運ばれる花びらの如く、ハルウララが突き進む。最終コーナーで突き放す気なのか、あるいは最後の直線で勝負を仕掛けるつもりか、彼女は舞でも嗜むように外側に膨らんでいく。

『最終コーナーに入つて、先頭はミホノブルボン！　しかし外側からハルウララが並んでくる！　そのすぐ後ろにはライスシャワー！』直線に入る直前、ミホノブルボンがすぐ横に視線を向ければ、ハルウララの顔が見えた。

目つきを鋭く、歯を食いしばり、腕をがむしゃらに細かく振るつて、その勝負服を泥まみれにしながら。彼女は必死に先頭に立とうとしている。

「——負けられない」

ふと、ハルウララの口元が動き、そんなことを言つたような気がした。

それはミホノブルボンの耳に、何故かよく届いたのかもしれない。あるいは、そう思わせる気迫からくる幻聴だったのかもしれない。

しかし、例えそれが幻聴であろうとなかろうと。

ミホノブルボンは前だけを見つめた。

その刹那、最終直線が顔を出したところで。

「いつつつつくよ——ツ！」

雷鳴の如き咆哮が、観客席の声さえ突き抜けて会場内に響き渡ると同時に。

とうとうその花弁は、突風に吹き飛ばされるように前に抜きん出た。

『ハルウララ！　ハルウララが先頭に躍り出たツ！　ハルウララの号令、ラストスパートでいよいよ、ハルウララが流星ミホノブルボンの先を行つた！　すごい、すごい加速だ！　やはり、この子に敵うウマ娘は居ないのか？』

「いいえ」

誰にも届かない否定の言葉を口で転がして。

ミホノブルボンは前傾姿勢を少しだけ起こした。

「私も、負けられません」

星が失速し、地に墜ちる。

そう思われたときに現れた、その急坂に。

——二対の星が今、空に還ろうと閃いた。

「ツ！」

『ミホノブルボンだ！　そしてライスシャワー！？　急坂を、急坂を平地よりも鋭く駆け抜けていく！？　まるで空に昇る龍の如く、彼女たちが最後の勝負を仕掛けてきたツ！』

ミホノブルボンが内に、ハルウララが中、ライスシャワーが外に。『先頭に抜け出たのはミホノブルボンツ！　続いてライスシャワーとハルウララが横並びだ！』

ミホノブルボンは、坂を駆け抜けた態勢のまま、その勢いに任せて突き進む。誰にも掴まるまいと、残つた全身全霊を推進力にターフを蹴り飛ばす。

だからこそ。

ミホノブルボンはその瞳を視界に捉えてしまつた。

雨の中でも消えない、青の焰が二つ灯る。

アメジストの瞳の奥から、その内なる熱を噴出して、その全身が青と黒に染まつっていく。

その姿は、まさしく彼女こそが流星なのだと言わんばかりの軌跡を残して。

軌跡さえも置き去りに。

今、青と黒の焰を突き抜けて、その極限まで引き絞られた五体が抜きん出る。

『抜いたア！ ライスシャワーが流れる星さえ置き去りに、先頭を貫いたツ！』

残り100という数秒の猶予。

「——ツ！」

ハルウララが叫び、ミホノブルボンに並ぶ。

ミホノブルボンはライスシャワーに食い下がり、半バ身の差を縮める。縮めた分だけ、ハルウララもまた加速した。

ミホノブルボンは見た。

ハルウララも、目にした。

あまりにも細かく動く腕に、高速で短すぎる間隔で踏み込まれる末脚。今にも倒れそうなほど傾けられた姿勢。

柳のようにしなやかに、星の瞬きよりも早く、嵐よりも激しい走行を。

それはどこか、舞い散る花弁のように印象的なもので。

『ゴールインッ！ 勝つたのは、勝つたのは！ 重賞レース初勝利の、ライスシャワーッ！ 無敗の二人に打ち勝ったシンデレラは今、年末最後の大一番に、グランプリに輝いたツ！』

「……」

『二着は、二着はミホノブルボン！ 三着、ハルウララ！』

実況はどこか、遠くから聞こえてくるようだつた。

黒のシンデレラは今、左の拳を突き上げて、大歓声に晒されている。

ハルウララは、どこかぼーっとした様子で、そんなライスシャワーのことを見つめていた。

大雨の中でも、歓声が弱まることはない。むしろ、雨に負けるなど

言わんばかりに、伝説を刻んだシンデレラに向けて、祝福が贈られる。ついに掴んだ星を、その左手が握りしめているのだろうか。

ミホノブルボンは肩を落とし、視線を落として、ただその場にたたずむことしかできなかつた。



「……」

控室の中では、沈黙が続いていた。

彼はミホノブルボンの走りに、何も言わなかつた。ただ、「お疲れ様」とだけ労いの言葉を掛けたきり、何も口にしなくなつた。

ミホノブルボンは、喉から言葉が出てこなかつた。

走りを振り返つたところで、自己判断においてレース運びに間違いはなかつた。

間違いがなかつたからこそ、彼も何も言わないのだろう。

強いて挙げるとするならば、最後まで全力で走り抜けなかつた、その脚が課題、といったところか。

バ場に負けないパワーはあつた。他に先頭を譲らないスピードはあつた。だが、それを支え続けられるスタミナが、足りなかつた。もしも良バ場であつたのなら、ミホノブルボンは最後まで駆け抜けることが出来ただろう。

そんなたらればの話をしたところで、慰めにもならないが。

「……ここに来る前、ウララと話してきた」

不意に、彼がそんな風に切り出した。

「すつごい悔しそうにしてた。すつごい泣いてた。……でも、笑つてたよ。ありがとう、だつてさ」

「……はい」

「ありがとう。君は、あのハルウララに、勝つたんだ」

震えた声が、不器用に高く響いた。

「——ごめん」

彼は、拳を強く握つて絞り出すように謝罪の言葉を口にした。

「勝たせてあげられなくて、ごめん……！」

ミホノブルボンは自分にも向けられたその言葉を聞いて、音を立てて歯を食いしばる。心の内で燃えたぎるその感情を初めて自覚した彼女は、その力を持て余したように強く、強く自分の拳を握り締めた。

40枚目 脱出術

トレーナーとして、あまりにも重い失態だった。

彼がやらなければならることは、特定のウマ娘に担当を勝たせることでは無い。レースに勝たせることこそが、トレーナーの責務なのだ。

クラシックで有マ記念の一着。更にはあのハルウララを抜き去つた。世間はきっと、新しいシニア世代に、大きな期待と希望を寄せることだろう。

だからどうしたというのか。

世間体を気にするな、とは言わない。だが、判断を誤つて勝てたかもしれないレースを落とすなど、あつてはならない。

重バ場にならないことを想定して勝率を上げる。二兎を追う者は一兎をも得ず、とそんなことわざを実践したつもりになつて、結果がこれである。

怠らず、重バ場のトレーニングにも比重をおいたのであれば。

「勝っていた」

敗因は、スタミナ切れだ。重バ場に予想以上にスタミナを消費させられたことが原因だ。ミホノブルボンが坂を上り終えた後、前傾姿勢を取らなかつたことこそ、スタミナ切れの証拠である。

そして驚嘆するべきは、ライスシャワーの異常な飲み込みの早さだ。

彼は、手元のスマホを弄つて動画をもう一度見返した。既に三桁に迫ろうという再生回数。それでも、このレースを考える、語るには見返すことが必要だった。

ライスシャワーは終盤まで、ミホノブルボンというペースメーカーに追従し続けた。その圧力、眼光とくれば、背骨をスツとなぞられるような、不気味なプレッシャーを感じさせるほどだ。動画でこれいふことは、それを直に受けていたミホノブルボンは一体、どれだけの圧力になつていたことか。

「……だ」

ライスシャワーは一度目の上り坂において、ミホノブルボンに追従しきれなかつた。そこで2バ身の差をつけた。

つまり、一度目の上り坂においてはミホノブルボンに軍配が上がつた。

「盗まれた」

肝要なのはそこじゃない。

ライスシャワーは、ミホノブルボンから決して視線を離さなかつた。追従する相手、ミホノブルボンに異常な執着を見せていた、と言えるかもしれないが、彼の考えは「そうではない」と結論がついてい

る。

次に注目すべきは、そのすぐ後のコーナーリングだつた。

「一緒だ」

ミホノブルボンの、流水の如き美しいコーナーリング。

ライスシャワーの、流水の如く自然なコーナーリング。

偶然では無い。

ライスシャワーは、ミホノブルボンのコーナーリングに追従して、それを自分の物にしてみせた。

スピングジというよりも、乾いた砂とでも言うべきだろう。吸収したものと決して逃しはしない砂という名の可能性の塊。

ライスシャワーというウマ娘は、大器晩成の傑物であつた。

そして最終コーナーの時。

ライスシャワーは、ハルウララに抜かれた。

「違う。わざと抜かれたんだ」

ライスシャワーの視線が、この時だけはハルウララに集中した。彼女が咆哮をあげたのは、ライスシャワーからの重圧から逃れるためか。それともただの気まぐれか。

ハルウララの最終フォームは、極限まで加速力を追及した走り方だ。スタミナと脚への負担を度外視に、とにかく足回りを早く、何度も素早く地面を蹴り付け、歩幅は短く走る方法。「ピッチ走法」を突き

詰めた走法こそが、ハルウララにだけ許された走りであつた。

その歩数差は、通常のウマ娘の2倍に近い。ストライド走法相手には、2倍では収まらない歩数が刻まれている。

ウマ娘という、時速70キロを繰り出せる生物がその脚力を持つて、通常の2倍以上の歩数を同じ時間に刻むことの、如何に恐ろしいことか。

ハルウララと同じ走りをしたウマ娘は故障する。それが議論の果てに出された結論であり、だからこそ、境外に……週一回どころか、數日に一回の気の狂つたペースでレースに出走してもけろりとしているほど頑丈なハルウララでなければ、この走りは成立しないのだ。

それを、ライスシャワーは最後の数秒だけ。まさしく、魔法を掛けられたシンデレラのように短い時の中。

ライスシャワーは、ハルウララの走法を再現してみせた。

「抜かれたのは、ハルウララから走りを盗む……いや、ハルウララの走りをより完璧に再現するため！」

レースで見た時には目を疑つた。

動画を見返して正氣を疑つた。

そして現実を理解した時、やられた、と自分の思慮の浅さに嫌気が差した。

「たしかに、数秒なら。数秒だけなら、しつかりケアすれば故障もしない」

それを彼主導の元、ミホノブルボンで出来るかと言われば、答えは否であるが。

しかし、ライスシャワーたちであれば確かに可能だらうと、現実味が伴つてくる。

「次は……春の天皇賞、か」

課題は山積みであつた。

スピードとパワーを支えるだけのスタミナ強化。
最後まで逃げ切るための、爆発的な末脚の体得。

3200というG1最長距離のペース配分の見直し。

そして何よりも難しい問題は、

「どうやつて、ライスシャワーと途中で差をつけるか」
コーナリングは真似された。

上り坂のコツまで体得し、ミホノブルボンに迫る勢いがあつた。
直線で差をつけるためには過剰なスタミナが必須となる。

小手先の技術はもはや、ライスシャワーには通用しないだろう。よ
くてイーブンに持つていける程度。

それがわかっているなら、やることは一つしかなかつた。

「……時間か」

ふと時計を見て、彼は立ち上がりトランクを引く。その手に伝
わつてくる重みは、やり残した課題のように後ろ手を引いてくるので
あつた。

「……」

どこか粘ついたような、息のしづらい沈黙が二人を包んでいる。
お互に、無言ながらも気を遣つていてるのか、視線は行き来する。
だが、視線がぶつかると途端に視線を逸らすのだ。まるでトランシー
バーのような遣り取りを、二人はミホノブルボンの実家に着くまで続
けていた。

田舎の清涼な空気、澄み渡るどころか喉に突き刺さるような鋭い寒
気に当たられながら、とうとうミホノブルボンの実家に到着した。
居間に通され、そこで彼がお土産をミホノブルボンの両親に渡すま
でが、どこか決まりきつた遣り取りである。

そして、その後からが彼にとつての本番、仕掛け準備であつた。
居住まいを正し、彼が口を開こうとしたところで。

「有マ記念、素晴らしいレースでした」

その言葉に、二人が肩を跳ねさせた。ミホノブルボンに至つては、
尻尾がピンと天をついた。

「……彼女は、ミホノブルボンは確かに、素晴らしいレース展開を見せ
ました」

絞り出すように、彼は何とか相槌のようになら返してみせた。

そんな彼の心境を知つてか知らずか、ミホノブルボンの父は大きく頷いて「そして」と言葉を続ける。

「あなたのトレーナーとしての手腕には、昔トレーナーをやっていた身として。まさしく肝を抜かれるような思いでした」

「……勝てなかつたのは、俺の……いえ、私の采配のミスです」

「ははは！ 未来が視えるならそうでしょう。ですが、そうじやない。あの雨、あの重バ場。そして真冬という季節。その環境下でも、『万年桜』と『黒のシンデレラ』と勝負させてみせた」

父は「私ならできない」とキッパリと断言した。それはもう、清々しいほどに潔く認めて頷いた。

「もしも晴れなら、勝つていたのは間違いなくブルボンです」

「……」

彼は沈黙を貫いた。

「きっと、あなたは複雑、という言葉では言い表せない胸中にあると思います。子煩惱の戯言、とでも思つてください」

彼の背中が柔らかく叩かれる。隣を見れば、ミホノブルボンが、ジッと視線だけで彼の方を見つめていた。

どこか責めるような視線から逃れるように前に戻すと、今度は彼女の父親の、父親然とした見守るような笑顔が目に入り、しかしそれから逸らすのも失礼だと思い。結局、視線を逃す場所はなく、優しい笑顔を受け止めるしかなかつた。

「ありがとうございます。あなたであつたからこそ、ブルボンはこれほど大きく成長しました。三冠達成も、私には危うげなく映りました。……ブルボンも、おめでとう」

「はい」

お互に笑い合う親子の団欒を見て、彼の両肩が縮むように前に突き出る。その雰囲気にあたらないように、身体が縮こまつっていた。

「ところで、この後の予定は決められていますか？」

「いえ。彼女に軽いトレーニングはさせるつもりですが、それも明日からです。今日はこのまま、ゆっくりとします」

「そうですか。古臭く、何もない家ではあります。実家のように寛いでください」

さて、それじゃあ私は部屋に、と立ち上がって話を切り上げようとしたところで。

彼は「すみません」と断りを入れて引き留める。また座ろうとする父に「ああいえ」と手で制して、すぐに終わると意思を示す。

「この後、もしよろしければお時間をいただければ。ご両親には、お話ししなければいけないことがあります」

真っ直ぐ、鋭く、彼の視線が父を射抜く。父はそれに目を一回、とてもゆっくり瞬かせた後、同じように余裕を持つて頷いた。

「ええ。それでは、夕飯の後に」

「わかりました」

今度こそ、父は居間を後にして、残つたのは二人だけとなつた。ミホノブルボンの母は夕飯の準備をしているのか、ずっと調理場の方に居る。

「父と母には、密に手紙を送つて近況を報告しています」

幾分か。親という緩衝材があつたおかげか。ミホノブルボンの方から彼に声をかけた。二度手間になるかもしない、というその意味に、彼は首を横に振つて答える。

「（ご）両親には、直接話さないといけないからね。君の選手生命を、俺はずつと握つてきてたんだから」

「……」

彼の左腕に、しゆるりと尻尾が巻きついた。添えられるような、あるいはマフラーのように緩く。触れるか、触れないかの絶妙な距離で。手を抜こうと思えば、何の苦労もなく出来るだろう。

「私はマスターに全幅の信頼を置いています」

「……うん」

それはきっと、心の距離だつたのかもしれない。ミホノブルボンは、鉄面皮の裏側に眞実を隠しているのかもしれない。

「難しいんだ。すぐく」

息を大きく吸つて、彼はそれを長く吐き出した。

そしてぽつりと。

「俺は、許されない失敗を一回もしてる」

ひとりごちるよう、誰に向けるでもない言葉がこぼれる。

「だから。俺はもう、二度と信じられない」

ないまぜの言葉だつた。苦しく捻り出すようなそれに、しかしへノブルボンは毅然と返した。

「私はマスター信じています」

「……」

彼はこれに答えない。ただ、何事もなかつたかのように、ぼーっと宙を見つめた。

「ごめん」

そんな中、唐突にぽつりとこぼされる。

それを聞いたからか、それとも頃合いだからか。

ミホノブルボンは席から立ち上がり、「母の手伝いをしてきます」と言い残して調理場に向かつた。その途中、彼の手の甲を尻尾の毛先がくすぐつたのは、偶然か。

「……難しい」

ウマ娘を勝たせることだけがトレーナーとして正しいのであれば、ハルウララはまさしく、トレーナーとしての正しさの証明であつた。だが、それを打ち破つて自ら間違いだと否定したのもまた、彼らであつた。

常勝無敗のウマ娘を育て上げるだけでは、トレーナーとして失格であつた。そこに間違いはないと、彼も確信している。

ならば、ミホノブルボンが有マ記念に負けたのが正しかつたかと言われば、それはない、とも断言できる。

ミホノブルボンの目標は達成した。

彼がやりたかつたことも、成し遂げた。

ならば、ミホノブルボンが次に向かうべき場所はどこなのか。

春秋天皇賞への勝利。秋シリアル三冠。URAファイナルズ決勝

での勝利。

春の天皇賞では、ライスシャワーだけでなく、メジロマックイーンが立ちはだかることだろう。

秋の天皇賞では、復帰したトウカイティオーが参戦するかもしれない。ライスシャワーは……わからない。そもそもライスシャワーにとつて、2000という距離は短すぎる。

有馬記念での雪辱を晴らすならば、最短で春の天皇賞に勝利しなくてはならない。相手の土俵たる長距離、G1最長距離で挑む必要がある。

「……挑む、か」

絶対王者から、挑戦者になる。

そんなミホノブルボンに彼から教えられることは、一体何か。

「……」

携帯を取り出しイヤホンを耳につけて、ノートをテーブルの上に置いて、ペンを片手に動画を再生する。

やれることは思いの外少ない。ならば、その幅を広げるためにも、やれることはやり切らなければいけない。

分析と考察を叩き出す。そこから対策を考える。そして、勝つために何が必要かを導き出す。

動画を見つめる彼は物静かに、しかし空気をピンと張りつめさせるほど真剣に、目の前の課題に向き合った。

「さて、お話がある、ということでしたが」

「はい。重要なことです」

一室。さつぱりとした和室の中で、ニス塗りの木製テーブルを挟んで、父と彼は向き合っている。お互いの前には湯気をあげるお茶があり、中央には菓子折りの入った木の器が置かれている。

彼は出された品々に手をつけず、一拍置いてから、それを口にした。「俺は笹針師です。ミホノブルボンにも、笹針の治療を施しています」父はそれを聞いて一度、目を見開いた。次いでどこか納得したようになるほど、なるほど、と何度も頷いた。

「あの子のスタミナ。快調な様子。あのスピード。支えていたのは、あなたの腕によるものでしたか」

「故障の排除については概ね。しかしあの能力は、ミホノブルボンの努力が生み出した力です」

「なるほど。あなたの針は、ウマ娘を守るための針である、と」

「そんなわけあるもん……いえ、そんな上等なものではありません」

力強く、拒絶するように彼は首を横に振った。

「乱刺手術ささばりは劇薬です。用法を間違えれば、ウマ娘を壊す毒になります。緊急でない限り、ミホノブルボンには月に一度の施術で済ませています」

「ふむ……私には、箇針のことは何とも。それが多いのか、少ないのかさえ分かりかねます」

「私がかつて担当したウマ娘には、週3回のペースで施術を行いました。……彼女は特別頑強であり、施術の必要があつたため行いましたが。普通のウマ娘であつても、月に三度は施術を行うでしょう」

加えて、と彼は付け足すように。

「私は菊花賞が終わつた後の施術以降、一度もミホノブルボンに施術を行つていません」

「……それは、何かブルボンに不調が見られた、といつたことですか？」

「いいえ。むしろ、元の調子に戻している、と言つた方が正しいです。乱刺手術を行つたウマ娘はそれが無くなつた時、引き際が手遅れになる」

「……なるほど」

重く、重く父は頷いた。

意図を理解されたところで、彼は居住まいを正して、ジッと父の方を見つめた。

そんな彼の様子に、父は見つめ返すものの、どこか余裕を持つた様子でそれを受け止める。

「本題、よろしいでしようか」

「……妻を呼びます。それから、しつかりと聞きましょう」

その中で、彼女の両親と交わされた密約。

箒針師という難儀な免許を持ったトレーナーの苦悩と重圧。それを一息に降ろした彼は、どこか憑き物が落ちたような顔で、父に礼を言い残し、その部屋を後にしたのであった。

その夜空には小さな星さえ美しく輝いていた。

闇世の中に溶け込むわけでもなく、他の光に隠れるわけでもなく。それぞれが綺麗に輝いている。

「マスター」

場所はミホノブルボンの実家の、玄関の前だつた。肌寒さに鋭く刺されるのにも構わず空を見上げていた彼は、玄関を開けてこちらを見つめるミホノブルボンに微笑むと、また空を見上げた。

「現在、外気は氷点下8℃となっています。外に長居しては、体調へのリスクが増大します」

「気を遣わせたかな」

「……疑問。夜空に特別な変調はないように思われます」

ミホノブルボンは玄関の戸を閉めると、彼の横に並び立つた。厚手のブルーのパジャマの上から、紺色の半纏を纏っている。

「君は寒くないのかい」

「体温調節は完璧です。つまり、問題ありません」

「そつか」

彼はほんの少し間を開けた後、ぽつりとこぼすように口を開いた。

「こんな星空の下で、誓い合つた男たちが居たんだ」

「……」

「どんなウマ娘だつて輝くものは持つている。どんな小さな星だつて輝けるように。俺たちは、そんな星を一等星に出来るんだ、つて息巻いてた」

彼は、どこか星空とは別に遠い場所を見つめながら語る。

「だから、走っているウマ娘を貶す奴らだけは、何があつても許せなかつた」

結託した、と彼は語る。

「証明して見せたさ。どんなウマ娘だろうと、一等星になれるんだ、つて。才能も、気質も、脚質も、適性も、経歴も、実績も関係ない。ただ、トレーナーとウマ娘が最高に噛み合った時、そのウマ娘は『主人公』になれる、って証明したかった」

彼は口元に笑みを浮かべた。

その瞳には、夜空のレース場が映っている。

「走るのが誰よりも好きな子だった。誰よりも頑丈な子だった。レースの女神に愛されたウマ娘だった。……代わりに、才能が欠片もなかつた」

でも、と彼は力強く言葉を続ける。

「才能なんてものは、超えられる壁だ。ウマ娘だけじゃ無理かもしない。トレーナーがどれだけ頑張つても難しい。……でも、ウマ娘とトレーナーが最高に噛み合つた時。トレーナーは壁の上で手を差し伸べて、ウマ娘がその手をとつた時には、その壁を超えることができる」

その壁の上に。ウマ娘が至る到達点を疑わず、待ち続けることが、一体どれだけ難しいことか。

ウマ娘がトレーナーを信じて、できると信じて、その壁を登り続けることが、どれだけ難しいことか。

「壁を越えたら、待つているのはレース場だった。トレーナーは完璧じやない。荒れたターフを引くこともあれば、重バ場のダートのような道だつて引いてしまう。そんな先の先、ゴールラインで、トレーナーは一足先に待つている。ウマ娘が走りきつてくれることを信じて、待つしかないんだ」

そして彼はぽつりと。

あまりにも空虚に聞こえて、耳に入つた途端にもたれるような重々しい言葉を、こぼした。

「俺は道を引くだけ引いて、ゴールじやなくて観客席にいた」

彼は上を向いたまま、言葉を続けた。

「観客席で俯いていた。それなのに、あの子は走るんだ。どれだけ転

んでも、泣きそうになつても、信じて走り続けてくれたんだ」

そして、と彼はミホノブルボンの方を見て、また空に顔を上げた。

「君が来た。紹介された時の俺、ひどい顔してただろう?」

「……不眠症、鬱病、その他の心理的合併症の発症が推測できました」

「実際、短いけど休職状態だつた。そんな時に、あの夢物語のような提案をされて、火がついた」

「……ウララさんの打倒。私を三冠ウマ娘にすることと引き換えに、

マスターが私に求めた契約」

「……俺たちには責任があつた。『勝てない』と言わしめるウマ娘に、勝つことができるることを証明しなきやいけなかつた」

両翼で飛ぶ鳥に対して、片翼の蛇たちは地を這つてそれを追いかけた。

「常勝無敗つていうのは、常に誰かの夢を奪い続けるつてことなんだ」「しかし、それがレースです」

「そうだ。ウララがG1ウマ娘ならそれでよかつた。でも、彼女はG3にG2含む、113の重賞タイトルを搔つ攫つた」

ハルウララと同世代のウマ娘からすれば、たまつたものではない。

彼女が走つていないレースの方が少ないなんて、いつたい何の冗談か。

それでも追いかけてくるウマ娘は確かに居た。後一歩まで追い詰めた猛者がいた。ハルウララが居なければ、あの七冠のシンボリルドルフに並ぶか、それ以上になる逸材が居た。

その才能全てを埋めてしまつたのが、ハルウララというウマ娘だった。

「全ての距離を網羅させた。全ての脚質に適合させた。芝もダートも走らせた。その上で1日に何レースだつて走れる丈夫さを持つていた」

でも、と彼は首を横に振つた。

「ウララはレースに愛されてはいたが、『最強』じゃなかつた」

「……名実共に、『最強』であつたことに間違はないと思われます」

「違う。ウララは才能に欠けていた。レースにおける第六感は身につ

いた。スタミナはなかつたけど、大好きなレースに打ち込む集中力と適切な処置で誤魔化せた。だけど、スピードと加速力は頭打ちだった

た」

だからこそ、超ロングスパート。

そしてスピードと加速力を無理やり補う、あまりにも間隔の短いピッチ走法。小柄で、パワーに恵まれなかつたハルウララに持たせることのできる、勝利を掴める走り。

「ウララに勝つ方法は単純だ。大差をキープしたまま逃げ切るか、ウララと並んだまま自分のラストスパートを遺憾無く発揮する」

「……後者は、ライスシャワーさんの走りに酷似しています」

「そうだ。そして前者は、君の走りだ」

「単純です。しかし私の記憶領域には、それに該当するウマ娘は二名しか居ません」

「俺はそれに加えて後三人思いつく。春秋天皇賞に、ジャパンカップで必ず戦うことになるはずだ」

そして、と彼はひとつ息をつくと。

ようやく空を見上げるのをやめて、ミホノブルボンに向き合つた。

「来年の有馬記念は、埋没したハルウララ世代の猛者が集まる」

埋没の世代。

ハルウララとデビューワークを同じくしたウマ娘たちは、いつしかそう呼ばれるようになつた。

二着に、三着に。ハルウララの影に沈んできたウマ娘は、しかし言い換えれば、そんなハルウララと張り合うだけの闘争心に燃え、諦めず走り続けてきた、ほんの少し天秤が傾けばハルウララに勝つていた不屈の猛者たちだ。

敗北を知り、辛酸を舐め続け、それでも尚立ち上がり、勝負し続けた。正真正銘のレースウマ娘であり、どの世代のどんなウマ娘よりも負けず嫌いの集まつた戦火の時代。

ハルウララこそが勝者の基準であり、そこに向けて血の滲む努力をし続けてきた、勝利に飢えた獣たちの集い。

抑圧され続けた獣が、その渴望を解放した時。一体、どれだけの力

を発揮するのか。

「春秋天皇賞。ジャパンカップ。そして、有マ記念だ」

彼は力強く宣言した。

「三冠じや止まらない。七冠ウマ娘になつて、URAファイナルズで、トウインクルシリーズ最後の冠を飾ろう」

彼はミホノブルボンに手を差し伸べて、その癖どこか緊張した面持ちで。

「その努力で、最強のステイヤーに至ろう。君の真摯な積み重ねと、俺の引いた道さえあれば、必ずゴールできる。やろう、ブルボン」

彼はそんな誘い文句を言い切った。

どこか早口で、声が震えていて、拙さの残る声だった。まるで、新人トレーナーのスカウトのようだ。

「もう一声、不足しています」

彼女はにべもなく突っぱねた。これに彼は目を丸くして、差し出した手をグッパと開閉を繰り返して、視線は空とミホノブルボンを行きました。

「……言わないとダメ？」

「マスターに、その覚悟があるのであれば」

「その言い方はちょっと卑怯だなあ」

彼は一度、目を瞑つて大きく呼吸する。

大きく吸つて、そして吐き切つた後に。

緩慢に、しかしあまりにも鋭く、据わつた覚悟の瞳をミホノブルボンに向かえた。

「改めて言おう。俺の人生を君に捧げる。代わりに、君の命を俺に委ねてほしい。俺は君のことを信じるし、君が信じてくれる俺のことを信じよう。だから代わりに、君は俺のことを信じて、俺が信じた君自身を信じてくれ」

「……マスター」

一世一代、とも呼べる熱烈なスカウト。人生を賭けたスカウトに対して。

ミホノブルボンは大きくため息をついて、じつとりと、どこか呆れ

を伴った視線で彼のことを射抜いた。

「私はこれまで、マスターのことも、マスターが信じた私自身のこと
も、疑つたことは一度もありません」

「……え」

いや、そこは綺麗に手を取つて笑い合うところ、と意表をつかれて
固まつている彼に向けて、ミホノブルボンの容赦のない言葉は続いた。

「そもそも、マスターは担当である私よりも、元担当のウララさんのこ
とを信じている節が常々ありました」

「え、あ、いや。それは、仕方ないというか」

「言い訳は不要です」

びしやり、と言い切られて彼も口をつぐむ。思わず一歩引くと、彼
女はそれよりも大きな一步で彼に詰め寄つた。

「私は、ウララさんに勝てることに疑いなど初めからありませんでし
た」

「ええ……？」

記者が聞いたら白目剥きそなことを平氣で、堂々と宣言する。彼
も困惑気味に声を上げるも、名刀の切先のように鋭い視線を向けられ
て、とうとう閉口する。

「マスターの提言通り、ウララさんに勝つだけなら『大逃げ』こそ勝率
の最も高い作戦です。しかし、『大逃げ』ではライスさんへの勝率はゼ
ロに等しくなるでしょう」

「……だけど、ライスシャワーだつて大逃げする君に終始張り付くな
んて」

「できます。ライスさんなら、どこまでだつて付いてくるでしょう。
そしてライスさんであれば、100回先日のウララさんと競つたとし
て、99回は勝てます。そういう『走り』なのだと、気付きました
「……よく見てるね」

「ライスさんに勝つのであれば、脚をためる必要があります。加速力
はライスさんに軍配が上がりましたが、最高スピードは私に分があり
ます。追従する力に目を見張るものはありますが、ライスさんは終盤

まで先頭は絶対にとれません」

菊花賞。そして有マ記念。

たつた二つのレースで、分析と考察を繰り返した彼と同じ結論に辿り着いている。ライバルたちの明確な弱点を理解している。

「マスターに一つ、お聞きします」

その上で、ミホノブルボンは投げ掛けてくる。

「私は『万全な』ウララさんに勝てると思いませんか？」

全て気づいているのだろう。

理解している上で、彼に聞いている。

彼はその問いに、長く、長く息を吐いた。

肩を落として脱力し、瞑目して凧に至ると、その刹那に瞬くような鋭い視線をミホノブルボンに向けて。

しつかりと、頷いて見せた。

「来年のURAファイナルズで勝つ。2500の無差別級。ただ、そこに出るのはウララだけじゃない。ライスシャワーも来る。埋没の世代が研ぎ続けた牙を剥ぐ。あのシンボリルドルフが走る」

「……目標設定。つまり『最強のウマ娘になる』、と宣誓します」

「なら俺は、君を『最強のウマ娘に育て上げる』、と誓おう」

二人は改めて向き合うと、お互いに頷いて見せる。

星々のきらめきが降り注ぐ中。

彼とミホノブルボンは確かに、その手を交わした。

「契約」

「完了だ」

熱をはらんでいた。

その手は、まるでカイロでも握っているように暖かく、ともすれば温度が最高潮に達したときのように熱い。

頃合いか、と彼は手を放そうとふと力を抜くも、ミホノブルボンは彼の手を握ったまま離さない。

その真意を確かめようとミホノブルボンのことをよく観察しても、どこか満足そうに微笑んでいるだけで、答えは返つてこない。

「月、見えないね」

彼はミホノブルボンと肩を並べると、空を見上げて白い息と共にそ
んな言葉を吐き出した。

ミホノブルボンの耳がピン、と直立する。

「……走り抜けた先に、必ず見えてきます」

「うん？ えっと……ああ。『走り抜けた先には星飾る。一等星の光
に月照らす』だつて。三女神様の絵本に出てくるフレーズ」

「はい。このフレーズにおける『一等星』の意味を、マスターはご存知
ですか？」

「主人公であり、太陽。学問的に太陽の等級はマイナスなんだけど、児
童向けだからね。一番輝いている星、っていう意味では間違ってない
し……うん？」

ふと彼が横目を向けると、毛先が掛かる程度に、彼の腕に尻尾が預
けられていた。

『一等星』になるのは、この私です」

「……うん、なら」

きゅつと、繋いだ手を握る力が強くなる。

真冬に関わらず少し汗ばんでくるほど熱く、強く握り。

「100枚の約束は、満月の夜に果たそう」

「……はい」

ミホノブルボンは、月を見ていた。

ジツと、ない筈のそれを想起して。まるで雨月のように、心の中の
名月を楽しんでいたのか。

あるいは、彼女の瞳には本当に、その名月は映っていたのだろうか。
「必ず、満月の夜に」

彼女は名月に誓う。

逃げる先は、いつだつて前だつた。後ろに逃げたことも、どこか見
当違ひな場所に蛇行したわけでもない。

逃げウマ娘は、どこまでだつて前に行く。誰も届かないその先で、
待つている誰かのもとに一番にたどり着くために。

努力の星。

あるいは、願いを叶える流れ星。
たどり着く場所は変わらない。

ミホノブルボンは、決して掛からない。